

世界を救うため、この謎は私が解く——。

アカデミー賞®女優、アリシア・ヴィキャンデルが魅せる、
21世紀のトレジャー・ハンター“ララ・クロフト”！
誰よりも強く、賢く、美しいニューヒロインが
史上最難関のミッションを受け、空前絶後の冒険がはじまる——。

誕生から20年以上もの間、世界的人気を獲得し続けるゲームシリーズ「トゥームレイダー」。
その主人公が“女性版インディ・ジョーンズ”としておなじみのララ・クロフトだ。
資産家の令嬢として生まれ、冒険家だった亡き父の遺志を受け継ぎ、最初の任務にトライする姿を描く。
それはなんと、神話上の島に隠された、世界を滅ぼす“幻の秘宝”を封印すること。
ミステリアスな土地で繰り広げられる、無敵のアドベンチャー・ヒロインが誕生するまでの物語——
知られざる“ララ・クロフト伝説”がついにベールを脱ぐ！

主演をつとめるのは、いま最も注目される演技派女優の
アリシア・ヴィキャンデル(『リリーのすべて』『エクス・マキナ』)。
若くしてオスカーを手にし、ルイ・ヴィトンの新しいミューズでもある彼女が、可憐で知的なイメージを刷新。
この役のために強靱な肉体を作りあげて、観客の度肝をぬく本格アクションに初挑戦。
驚きの新境地をパワフルに切り開く。

ジャングルで、嵐の海で、鍛え抜かれた究極の美ボディによる、
大迫力のサバイバル・アクションが展開。
次々に降りかかる謎と、幾重にも仕掛けられた罠。
果たしてララは“幻の秘宝”にたどり着くことができるのか！？
世界の運命は彼女にかかっている！

プロダクション・ノート

伝説の始まり

アリシア・ヴィキャンデルをララ・クロフト役に迎えたまったく新しいオリジン・ストーリー『トゥームレイダー ファースト・ミッション』——観客はララ・クロフトのまさに最初の冒険と一緒に体験するだけでなく、彼女の内面の奥深くまでのぞきこむことになる。世の中で居場所を見つけるため、彼女は自分の過去と未来をつなげなければならない。決断を迫られるたびに彼女が何を選び、なぜそれを選ぶのかを探りながら、本作では彼女が史上最強にしてもっとも人気のあるアクション・ヒーローのひとりとなった過程を追っていく。

フィルムメーカーたちが本作の重要なインスピレーション源とし、最新バージョンのララ・クロフト像のヒントとしたのが、傑作と評価されて大ヒットした 2013 年のビデオゲーム「トゥームレイダー」である。同作は全シリーズ中最大の売り上げを記録した。そのシリーズ全作を楽しんで育ったという本作の監督ローア・ウートツグはこう語る。「私はあのシリーズのゲームの操作性にほんとうに驚いた。もちろん、あらゆる謎を解き、すべてのワナをかいぐり、墓を暴くカッコいいララ・クロフトというキャラクターにも夢中になった。でも 2013 年のゲームがどんなものかを知ったときは、このキャラクターを説得力のあるリアルな視点で捉えている点がとても刺激的だったし、絶対に大スクリーン上でも魅力的だと思ったんだ」

本作の製作は、数々の作品を手がけてきたベテラン・プロデューサーのグレアム・キング。ビデオゲーム「トゥームレイダー」の映画化権を数年前に獲得した彼もまた、このキャラクターが生まれた経緯をぜひともスクリーン上で描きたかった。「ララ・クロフトは、エンターテインメントの世界、とりわけ映画ではまれな強くて人気のある女性主人公のひとりで、彼女は映画でしばらく描かれていなかった。そんなキャラクターを再び探求し、現在の世界に通じるかたちで彼女のオリジン(起源)を紹介するには今が絶好のタイミングだと思う。トーンは変化していて、ストーリーには多くのドラマ的要素が含まれ、感情表現も豊かだよ。そしてもちろん、事実上ノンストップのとてつもないアクション・シークエンスもある。ビデオゲーム版のプレイヤーたちと同じく、現代の映画ファンも、彼女と一緒にこの冒険を楽しんでくれると思う」

そのララ・クロフトを演じるアリシア・ヴィキャンデルもゲームを楽しんで育ったというだけでなく、大ファンでもあった。「子供のころ、うちにはビデオゲームがなかったので、持っている友達の家遊びに行くのがすごく楽しみだったの」と彼女は思い返す。「『トゥームレイダー』シリーズを初めてプレイしたときはハッとさせられたのを覚えている。若い女の子が主人公のビデオゲームなんて、それまで見たことがなかったもの。しかも彼女は女性というだけでなく、ものすごくエネルギーで、決意が固く、能力もある。そんなところに私はとても惹かれたの。当時、私は 10 歳かそこらだったから、当然のように、ゲームの中では大きなクロフト邸でトレーニングばかりしていた」

成長するにつれ、当然、ゲームの難易度も上げていったヴィキャンデルはこう語る。「この映画のことを聞いたとき、私はシリーズの新しいゲームを買いに行ったの。そこに登場するララは、初期のゲームシリーズの本質を保ちつつも、彼女をその始まりから追うことができた。私にとって、彼女は誰もが愛するスーパーヒーローやアクション・ヒーローのようなものなのよ。私たちはお気に入りのヒーローが試練を乗り越えて“スーパーヒーロー”になっていくのを見ることによって、彼らを身近に感じ、心情的に理解できるものなのよ」

ゲームと同じく、フィルムメーカーたちは映画でも迫真のアクションを見せることを目指し、ララの目を通してさまざまな出来事を観客に体験させ、その真っ只中にいるかのような臨場感を与えようとした。銃弾——そしてありとあらゆる危険な障害物——を避け、一瞬の判断でありえないほど複雑な謎を解きながら、全速力で走り、全力で戦い、弓矢を放つ。ララは直面する困難のどれひとつでも乗り越えるためには、体力、技術、知恵、スタミナを振り絞らなければならない。だからこそ、彼女のビデオゲームには世界中の熱烈なファンがついているのだ。ゲームの中で、プレイヤーはアクションの真っ最中に放り込まれ、めったに経験できない仮想冒険に毎回連れ出される。

本作の脚本は、ジェニーヴァ・ロバートソン＝ドワレットとエバン・ドーハティの原案より、ロバートソン＝ドワレットとアラスター・シドンズが執筆した。「私は人生の大部分で『トゥームレイダー』ゲームをやってきたんだ。広大な神話の中心部にいる魅力的なキャラクター、ララ・クロフトが、真のポップカルチャー・アイコンに育っていくのを見守ってきたんだよ」とドーハティは言う。「そんなキャラクターとビデオゲーム・シリーズを今回、ドラマチックに再構築することに協力できるのは光栄だよ」

さて、本作でララの冒険が本格的に始まるのは、父の生涯に“公式”に終止符をつけるように彼女が頼まれたときだ。父を案じるこの反骨精神のある若い女性がそうする代わりに受け入れるのは、父の運命を知る手がかりの最後のひとつである日本のパズルに挑むことだった。そして彼女は、結局のところ、これが最後ではないかもしれないと確信を持ち始める。彼女が見つけたもの、それは彼女を遠く離れた場所、地球上のいちばん遠い東の端にある場所である。

「父と娘の関係はこの映画の芯になっている」と監督のウートッグは言う。「父は彼女を捨てたのだが、彼女は父のことを思い切ることがいまだにできずにいる。彼女は、心にぽっかりと開いた穴を埋めようとして生きてきた。そしてこの最後の謎を知ったことをきっかけに、彼女は父に何が起きたのかを調べ始め、大きな冒険に乗り出すことになるんだ」

**「人は誰も人生のある時点で、
自分自身、そして自分の運命と向き合わなければいけない」**

伝説の体現

どんな困難にも立ち向かえる大胆さと立ち直りの早さと揺るぎない決意の持ち主。しかも頭がよく、粘り強く、高潔で、だけどもろく、人間味がある……そしてなんといってもカッコいい。それらはフィルムメーカーたちが本作のララ・クロフト役の俳優に求めた資質のほんの一部だ。そして監督のロアー・ウートッグによれば、彼らはアリシア・ヴィキャンデルにそのすべて、いや、それ以上を見いだした。

「私がララ・クロフトに興味深いと思うのは、彼女は失敗するたびに傷つくけれど、必ず再び立ち上がって目的のために戦い続けることなんだ」とウートッグは言う。「この映画では、それがボクシングのリング、自転車レース、あるいは命懸けのレースでも分かる。アリシア自身も同じように執拗で、決して途中でやめない。彼女によってどのシーンも迫真に満ち、彼女は演じるプロセス一つひとつに全力を注いだ。感傷的なシーンだろうが、思わず笑える瞬間だろうが、壮大なアクション・シークエンスだろうが、彼女がやることはすべて説得力がある」

ヴィキャンデルは、ララが直面する精神的・肉体的なチャレンジに取り組む機会を大切にしたい。ララが次々に難題にぶつかっていくなかで、そのふたつが絡み合うことも多い。「ゲームでのララに見られる特色が、映画の中にすべて含まれていることがとてもすごいと思った」とヴィキャンデルは言う。「ララはまだ、さまざまな装備や道具を使いこなせていないんだけど、それこそがこの映画の意図するところなのよ。それに、その場を独占し、声を上げてはつきりものと言う勇気がありながらも、自分のもろさも見せてしまう女の子を演じるのは楽しいわ。いろいろな資質がすべて彼女には備わっている。恐怖心と同時に生存本能が生まれる状況に陥った彼女が、それまで自分でも知らなかった資質を見つけていく様子、そして戦士としての能力を発揮していく様子を、観客も彼女と一緒に発見していくことができるのよ」

製作のグレーム・キングはこう語る。「アリシアは、分かっている限りでは最後に父親がいた場所での状況にかかわる手がかりを探ることで、第二次世界大戦のオンボロ飛行機の翼にぶら下がることで、あらゆる点でリアルさを感じさせてくれる。ちなみに、彼女がああシーンを撮影したとき、私はモニターの横で落ち着いて立っていたよ。同時に、彼女がほんとうに危機に直面し、私も彼女と一緒にそれを体験しているような気がして、不安にもなった」

スウェーデン出身のヴィキャンデルは、同じスカンディネビアのノルウェー出身であるウートッグ監督と組むことを大いに喜んだ。「私はロアーの作品を数本観ており、彼はすばらしい監督だと思う。彼はこういうタイプのジャンル映画に情熱を注いできたし、こういう映画に昔からあるすばらしい点を継承しつつも、とても感情豊かにストーリーを語ること

ができる監督なの」とヴィキャンデル。「彼が監督した『THE WAVE／ザ・ウェイブ』の登場人物たちにははるごう感情移入できたし、彼がこのアドベンチャー大作でどんなことをやってのけるのか、その中に参加できることにとても興奮したわ。彼ならきっと、アクション面だけでなく、感情面でも観客を引きつけられると分かっていたから」

本作でララ・クロフトの心と苦しみが明らかに父との結びつきから生まれていることは、彼女の子供時代の回想から分かる。ヴィキャンデルはこう語る。「ララは母を早くに亡くしたので、父がただひとりの親で、ふたりはとても仲がよかったのよ。父は彼女に幻想的な物語を聞かせ、弓矢の使い方や宝探しの魅力を教え、なぞなぞやパズルの解き方を伝授したの。でもララが成長するにつれ、父は外の世界での仕事に多くの時間をとられるようになり、どんどん仕事に没頭していった。そしてある日、彼女が14歳ぐらいたったとき、父はまた旅に出かけ……二度と帰ってこなかったの」

「映画の冒頭で登場するララは、父と最後に会ってから7年ぐらいたっているんだけど、まだ悲しむことができずにいる」とヴィキャンデルは続ける。「彼女は諦めきれないの。ちゃんとした答えなしではね」

それだけ父の思い出に執着しているにもかかわらず、ララは父に関連するもの——自分が育った家や父の会社など——とのかかわり合いを避けてきた。彼女にとって、父がいないなかで彼の人生の“名残り”にかかわることは、父の死を認めることを意味するからだ。

**「あなたのお父様はもういない。でも事業は引き継げる。
それがあなたの宿命よ」**

クロフト・ホールディングスで長い間重役を務めてきたアナ・ミラーは、ララを留置所から出したときにそう語りかける。クリスティン・スコット・トーマスが演じるアナは、教養があり、洗練された大人であり、ララがそうでないことに対して落胆を隠そうともしない。だがアナは希望を捨ててはいない。彼女は、ララを昔から知っているごく少数の人間のひとり。だからララが、父の死も、それに伴う遺産も受け入れようとせずに、生きることに苦労しながら身につけてきたタフな外面にはだまされない。21歳になった今、ララが父の娘、相続人として、会社を引き継ぐ時がきたと、アナは確信している。だがララは、自分はクロフト家の人間であっても、そういうタイプではないとアナの言葉を即座に否定する。

外から見るとは、ララは正しい。

ララもアナも気づいていないのだが、ララは実際、まさに父親そっくりのクロフト家の人間だった。ふたりとも、クロフト社が規模の大小を問わず、世界的な企業多数と取引があったこと、リチャードが愛する娘を“ベイビー”と呼んでいたことを知っていた。だが、リチャードは真の関心事を隠し続け、何かを追い求めて世界中を駆け回っていた。それは大切な、ただひとりの子供を家に残していくほど重要だったのだが、それでも彼は永遠に戻らないつもりはなかったはずであり、娘がいつか、自分の残した見つけにくい足跡を追うことになるとは思いもしなかった。

リチャード・クロフトは、彼の妻であり、ララの母親の死後に起きた超常現象の証拠を探し始めた。亡き妻とつながり続けるための手段として始めたことが、彼の使命となった。彼は、娘のララを含め、日常生活の誰からもそれを切り離し続け、会社の重役会議や取引よりも明らかに優先した。そしてそれは彼の命も奪ったらしい。

監督のウートッグはこう説明する。「リチャード・クロフトは、イギリスの田園地方にある大邸宅で暮らす、成功している実業家だというのが誰もが思っていたことだったし、実際そうだった。だが、彼には誰も知らない秘密の人生もあったんだ」

父には自分が知らない顔があったのかもしれない。ララが初めてそう感じたのは、クロフト社の事務弁護士ヤツフェと会ってからだ。デレク・ジャコビが演じるヤツフェは、かつてはリチャードととても親しかったこともあり、ララの苦境に同情している。法的に父の死を受け入れることによって、ララは象徴的に思える形見を受け取ることになる。だが、その形見こそ——日本のパズル——が、父の失踪の謎を解こうとララが考えるきっかけになる。

愛情あふれる、だが、気ままな父は娘を残していなくなってしまった。だが、彼は娘の人生を永遠に変えることになる遺言を収録したビデオメッセージも残していたことをララは知る。リチャード・クロフトを演じるドミニク・ウェストは、ヴィキャンデルと同じく、このエネルギッシュなアクションの中で描かれるキャラクターの複雑さに惹かれた。

「僕には娘が3人いる」とウェストは言う。「だから、この映画の脚本を読んだときにいちばん惹かれたのはその点だったんじゃないかな。これだけのアクション大作で描かれる父と娘の関係の感情的な深みにグッときたんだ」

自分自身、親として、このキャラクターになりきるうえでもっとも難しかった側面について、ウェストはこう語る。「すでに母親を失っている娘をどうして捨てることができたのか、僕は理解に苦しんだ。彼はひとり親として非常に大きな責任を感じていたに違いないから、それが娘を残していなくなるということにつながったのかもしれない。僕はそう考えて、それがどんな感じかを想像しようとした」

ララは、父リチャードには秘密の人生があったこと、そしてそれが父のライフワークだったことを突き止める。そのとき彼女は、父が人類にとって重大な脅威だと信じた、ある考古学プロジェクトについて知る。リチャードはビデオメッセージで娘に危機を警告し、彼女自身を守る方法として、すべてを破壊するよう指示を出していた。「ララは父が何を言っているのかを理解すること自体、難しいのだが、同時に、彼のメッセージとファイルを通して、父が娘のもとを去ることにしたのは、結局は第一にわが子の未来、そして世界の未来を案じたからだ」と彼女は気づくんだ

じつは本作はウェストがヴィキャンデルと組んだ初の映画ではない。「共演したことがあるどころか、アリシアの父親を演じたことがあるんだ」と彼はにっこりする。第一次世界大戦を舞台にした 2014 年の『戦場からのラブレター』のからだ。「この役のオファーを電話で受けたとき、僕はとてもうれしかった。即座に出演を承諾したよ」

不思議なことに、父が最後の旅でどんな遠い場所へ行ったのかを知ると、ララは父に近づいた気がする。そして“従順な”娘なら当然のごとく、彼女は父の願いを完全に無視し、生きている父を最後に見た人物を捜し始める。

ララの壮大な冒険の第一歩は香港から始まる。彼女が捜しているのはルー・レンという名の男。そして彼女は彼を見つける……ある意味で。ララが見つけたルー・レンは、じつは彼女の父と連絡をとっていた男の息子だったのだ。だがララにとっては、どのルー・レンでもかまわない。その男が船を操縦できて、分かっている限り、父の最後の目的地である絶海の孤島へ彼女を連れていけばいい。

ダニエル・ウーが演じるルー・レンは、確かに船は持っているものの、航海ができるようには見えない。「ララがルー・レンに会うとき、彼はあまりいい状態じゃない」とウーは認める。「彼は実際、かなりの酔っ払いなんだ。それに彼の船エンデュランス号は、船というよりは、錆びた廃材の塊なんだよ。でも、彼の父親もやはり7年前に失踪していることが分かる。彼の父はかなりの借金を残したため、ルー・レンは家業を引き継ぐしかなかった。遊覧船を運航したり、密輸したり、とにかく生活していくために何でもやっているが、どれも彼がやりたいことではないんだ。そんなわけでララとは違い、彼は自分の父親の捜索は諦めていた」

しかし、ルー・レンの場合は金がものを言う。「ララはお金を払ってルー・レンを説得し、バミュダ・トライアングルのアジア版のような地域へ自分を連れていかせる。ルー・レンはそれに同意するくらい金に困っているんだ」とウーは説明する。

ウーはヴィキャンデルと同様に、長年のゲーム愛好者だ。「僕はビデオゲーム『トゥームレイダー』シリーズのファンなんだよ」と彼は言う。「あれは女性アクション・ヒーローのカッコいいゲームだったし、当時の恋人——今の妻——もよくやっていたんだ。僕はアリシアが出ると聞いてこの映画にすごく惹かれた。しかもララ・クロフトのオリジン・ストーリーだし、南アフリカで撮影するという点もよかった。南アフリカは僕にとって特別な場所なんだ。あそこで結婚したからね」

実際の場所も、ルー・レンとララが初めて会う場所に仕立てられたロケ地も、ルー・レンにとって個人的に関係ある土地だった。ヴィキャンデルはこう思い返す。「ダニエルと最初に撮ったシーンは、南アフリカのケープタウンに作られた偽の香港が舞台だったの。私もすごいと思ったけど、ダニエルはもっと感銘を受けていたみたい。彼は実際に住んだことがあったからよ。セットを歩きながら彼からいろんな話を聞けてすごくよかったわ」

ウーは、国際色豊かなキャストの一員となったこと、さまざまな文化背景をもつスタッフ、そして監督のロアー・ウートツグと組んだことをとても喜んだ。やはりウートツグの『THE WAVE / ザ・ウェイブ』のファンだという彼はこう語る。「あの

映画は、ヒューマンドラマとエンターテインメント大作との間で絶妙なバランスを保っているよね。そのふたつをあれだけうまく組み合わせるには、特定の感性が必要で、ロアーにはそれが備わっているんだ」。ウーはまた、ウートツグの演出スタイルも気に入った。「彼は口数は少ないけれど、指示はとても簡潔明瞭なので、彼との仕事はすごくやりやすい」

ウートツグのほうも、ウーのそれまでにない面を見せたいと思った。ウーは、そのキャリアを通して数多くのファイト・シーンを演じており、アクション・シークエンスには慣れている。「この映画の彼は、これまで見せてきたカンフーをやっているわけではないんだ」とウートツグ。「それなのに彼はやっぱりカッコいい！」

ララと同じく、ルー・レンも絶海の孤島に上陸後は自分自身、そしてほかの人々を守られなければならない。その島は日本の沖に散らばる6,000ぐらいの島のひとつで、秘密組織トリニティが資金を出した長期間の調査隊に乗っ取られている。トリニティは、人類の運命を支配するために、超常現象のコントロールをめざす武装組織だ。そしてその島では誰ひとりとして、たとえ組織のリーダーでさえ、使命をまっとうするまでは離島を許されない。

その傭兵を集めた武装組織の冷酷なリーダーはマサイアス・ヴォーゲル。彼らは、またの名を“死の母”と呼ばれる古代の女王ヒミコのみイラ化した遺骸が納められていると思われる2000年ほど昔の墓をあばくという、どう考えても不可能な任務を課されている。リチャード・クロフトの日記によれば、その墓の中身は人類にとって想像を絶する脅威になりうる。それでも、この島に閉じ込められた7年以上の歳月で、ヴォーゲルたちは墓を掘り出し、あばかせるために、島の浜に座礁した不運な漁船の漁師たちを奴隷にしてきた。彼らは墓をあばけば、故郷に戻れると考えている。そしてその間にヴォーゲルは、この任務の明らかな無益さに正気を失っていた。

無益。まさにそうだ。もうひとりのクロフトが島にやってくるまでは。ヴォーゲルはララに、彼が自らララの父リチャードと、リチャードが墓の正確な場所についてもっていたかもしれない知識も葬ったと認める。ヴォーゲルはまた、ララのリュックからまんまと盗んだリチャードの日記を勝手に読む。

冷酷なヴォーゲルを演じるウォルトン・ゴギンズは、ウートツグ、ヴィキャンデル、ウーとは違い、「私はビデオゲームに熱中したことは一度もない。最後にやったゲームは『ドンキーコング』だったんじゃないかな。もちろん、ドンキーコングを殺したよ」と笑う。「この映画への出演の話がきたとき、『トゥームレイダー』については何も知らなくて、ゲームを通して物事を見るというプレッシャーがないという点も気に入った。脚本を新鮮に読めたからね。このヴォーゲルがゲームに存在していたかどうかさえ知らず、誰にも訊ねなかった。フィルムメーカーたちがさまざまな意味でもととの媒体に敬意を払うことは分かっていたしね。俳優として、ストーリーテラーとして、私は自分が演じるのが生身の人間だということを認識して、そこからキャラクターを練っていった」

「ウォルトンは演技に熱中する俳優だが、セットをととても楽しい場にもしてくれる」とウートツグは言う。「彼はこの映画の悪役にうってつけだ。ララと同じく、目標があるヴォーゲルに、人間的な側面をもたらしてくれた。ヴォーゲルの望みはララとは正反対だけだね」

ヴィキャンデルも同感だ。「ウォルトンは私が出会ったなかでも、とりわけ情熱的な俳優のひとり。彼は毎日100パーセントのエネルギーで撮影に臨み、自分の役にも、セットにいる全員にも愛情と思いやりを注いでくれた。そのシーンで自分が演じるキャラクターがうまく機能しているかだけでなく、誰にとってもそのシーンがうまくいくように、いつも気を配ってくれたの。彼のおかげでマサイアス・ヴォーゲルはこのストーリーにふさわしい悪役になったわ。相手の心を操り、後ろから忍びよるようなタイプの悪役で、ほんとうにゾッとする」

「キャストやスタッフのほかにこの役に惹かれた要因のひとつは、その人物の冒険の始まりでも、絶頂期でもないキャラクターを演じられる機会はとてもまれなことなんだ」とゴギンズは言う。早い段階で監督のロアー、製作のグレアムとも話し合ったのだが、私のこの男の見方はこうなんだ。彼は人生でいちばん長い一週間で最悪の一日を、同じことをただ情性で繰り返しながら過ごしているんじゃないかな。彼もリチャードも、理由はまったく違うがああ墓を見つけるために家族を犠牲にしたが、どちらも人生をも犠牲にした」

ヴィキャンデルはララに断固たる決意を注ぎ込み、ゴギンズはヴォーゲルの静かなる狂気を体現した。「アリシアはまさに大物だよ」と彼は言う。「彼女には前にも会ったことがあり、もし共演できたら特別な体験になると思っていたんだ。」

そして初めて共演したシーンをヴォーゲルのテントの中で撮ったとき、お互い、顔を見合わせて、『これはきっと楽しくなる』と言ったんだよ」

ララの周囲には彼女から何かを欲しがると人間ばかりいるように思える。それはジムの料金や家賃といったものから、彼女の人生にむやみに介入したがつたり、実際に彼女の命を奪おうとしたり。そんななかでララが素直に話ができる唯一の人物がハンナ・ジョン＝カーメンが演じるソフィーだ。アパートをシェアし、親友であり、相談相手でもあるソフィーは、孤児同然のララにとって家族のような存在である。

監督のウートッグはこう語る。「私がこの映画で大いに満足しているのは、キャストの質の高さなんだよ。アリシアを筆頭に、役の大小にかかわらず、すばらしい俳優がそろった」

「冒険の旅よ！」

新生ララ・クロフト

撮影が開始されるころまでには、アリシア・ヴィキャンデルは過酷なトレーニング・メニューをしっかりとこなし、体を鍛え上げていた。それでも、ララ・クロフトを演じるために必要な驚異的な肉体に仕上げるために、撮影前から撮影中を通して彼女はかつてプロのバレエ・ダンサーとして活躍した熱心さと鍛錬をこの役に注ぎ込まなければならなかった。ヴィキャンデルは、この肉体的にも精神的にも要求の大きい役のために、自身の限界を超えて奮闘した。それはララの旅に匹敵する道のりでもあった。

「バレエ・ダンサーほどタフな者はいない」と語るのは、世界的に有名なトレーナーであり、心身のコンディションをバランスよく整えるマグナス・メソッドの創始者でもあるマグナス・ライバックだ。「この作品に参加することになったとき、アリシアには高い期待を抱いていたが、彼女はその期待を裏切らなかった。彼女は完璧なララ・クロフトを創り上げたよ」

「バレエはとにかく厳しいスポーツよ」とヴィキャンデルは言う。彼女は 10 年以上前にプロとしてのバレエから離れたが、鍛錬に耐える能力は失わなかった。「バレエをやっていた当時のトレーニング方法と、今回の役のためにやったことと、確かに類似点があるわね」。そして本作用のトレーニングは撮影終了後も彼女の生活に残った。「この映画でのトレーニングを通して、私はロッククライミングを始めたの。ものすごく楽しい」

ライバックの指導のもとで、ヴィキャンデルは撮影の7か月前からトレーニングと栄養管理が組み合わされたプログラムを開始し、その当初のメニューの半ばで身体トレーニングを増やした。彼女のワークアウトには、集中的なウエイト・トレーニングと、日常的な活動の両方が組み込まれた。後者には休日のハイキングも含まれる。

「映画の冒頭で登場するララは、イースト・ロンドンに住んでいるごくふつうの女の子だけど、観客には彼女の身体能力の高さを知ってほしかったの。彼女はMMA(総合格闘技)のジムで友達とスパーリングをし、街頭でレースをするのが好きな自転車便の配達人なの。彼女はタフな女の子で、映画は始まるとすぐにその設定を出している」とヴィキャンデル。「その後も彼女がクライミングをし、格闘をし、水中に飛び込む様子が描かれる。この役のためでなかったら、あんなに多くの新しいことに挑戦している様子を人に見られることは、人生できっとないわね。おかげで私はとても自信がもてた。私みたいにやせていて、背も高くない人間が筋肉を5キロも増やすなんて。私の体重を考えると、かなりの比重だけど、それでも私は自分がものすごく女性らしいと感じたわ」

ライバックは、ヴィキャンデルにもっと熱心にトレーニングするよう諭す必要は一度もなかった。「栄養管理とトレーニングの比率は 50 パーセントずつなのかと、よく聞かれるんだ。現実的には、こういう役の場合、どちらも 100 パーセントなんだよ」と彼は言う。「そしてアリシアはもっと頑張った。彼女は徹底していたよ。僕がある運動を 15 回繰り返すように指示すると、彼女は 16 回やった。20 回と言えば、少なくとも 21 回はやったんだ」

高い集中力があり、設定された限度をつい超えてしまうとはいえ、ヴィキャンデルはときどき、ご褒美に設定してあった“ピザの日”が楽しみだったと打ち明ける。「マグナスは仕事に深い情熱をもっているけれど、彼が大切にしているの

はトレーニングをいかに日常生活に組み込むかということなの。今回は限られた期間で、狙いを絞った体を作るためにやったけれど、それは毎日の活動に応用できるのよ」

撮影中、ヴィキャンデルは毎朝 45 分から1時間のトレーニングをこなしてからセットへ向かった。トレーニング場所は、24 メートルのトラックに建設されたカスタマイズされたジムだ。

彼女の食事は、ライザックの厳格な指示のもとでシェフのレスリー・タッカーが毎日用意した。ゆっくりブドウ糖に変化するスローカーボと、脂肪分の少ないタンパク質だ。複合糖質には、玄米、キヌア、ビーフンなどが含まれ、主なたんぱく質源はサーモン、ツナ、卵である。ヴィキャンデルのお気に入りのメニューは、半熟卵、ポキ(ハワイ料理)とアジアン・フュージョン料理(複数の国の食材や料理を融合させた料理)で、ヘルシーな油とスパイスで調理された。彼女は一日に3時間間隔で食事を5回とった。

「アリシアは撮影でさまざまなことをこなさなければならなかったが、マグナスは見事な指導で彼女にしっかり準備をさせてくれた」と監督のウートグは言う。「彼女は何か月も懸命にトレーニングし、ほとんどどのシーンにもあったすべてのスタントをこなした」

スタント・コーディネーターのフランクリン・ヘンソンも心からヴィキャンデルを称賛する。「アリシアはすばらしい一流アスリートだよ。彼女はあらゆること——ワイヤーワーク、水中スタント、射撃、空中スタント、格闘、チェイス……。この映画にはすべてが詰まっていて、監督のロアーはもっと何かないと僕たちにいつもチャレンジしてきた。アリシアもいつもやる気満々だったよ」

どの映画の撮影でもそうであるように、本作の特定のスタントではスタントダブルが起用されたが、フランクリンはこう語る。「アリシアは多くのスタントを自らこなした。もちろん、僕たちがやっていいと許可した限りでだが。彼女はボクシングの試合もやったんだよ。リングに上がり、相手をぶちのめした！」

さて、ララ・クロフトの身体能力の高さと同じくらい象徴的なのが彼女の外見である。2013 年版のビデオシリーズでリブートされた彼女の外見を、衣装デザイナーのコーリン・アトウッドとティモシー・A・ウォンシックは生身の人間で実現させるためにたゆまぬ努力を払った。ケープタウン、ロンドン、そしてロサンゼルスでチームを組み、ふたりは Skype と携帯電話で絶えず連絡を取り合った。

「ケープタウンは美しい海沿いの街だけれど、必要なものがあそこでは揃わなかったんだ」とウォンシックは説明する。「だから私たちは、そのときどきにいる場所から連絡を取り合い、電話で買うものを決め、ロケ地へ送った。もちろん、問題が起きるたびに一緒に解決するパートナーとして、コーリンは最高だったよ」

「私たちにとっても、監督にとっても、この映画のララ・クロフトがビデオゲームのララ・クロフトと同じ外見であることが重要だった。それがファンが望む姿だからね」と彼は続ける。「私たちはそれを出発点として、さまざまなスタントがやりやすい衣装を工夫したんだ。アリシアがジャンプしたり、キックしたり、島のセットでやらなければならないどの動きも十分にできるように、パンツの縫い目にはストレッチの利いた布地を使った。なにしろ、彼女はあの島の浜に上がった瞬間から、ノンストップで動き回るからね」

ララ・クロフトのメインになる衣装として、ヴィキャンデルとスタントダブルの両方を考慮に入れつつ、衣装チームは、きれいなものから汚れたものまで4段階のダメージを反映させたカーキのカーゴパンツを 48 本、5段階の古さ加減を反映させたカーキ・ベストを 100 着、3段階のダメージを反映させたブーツを 14 足作った。また、ララはある時点で負傷するため、包帯も片手、上腕、片脚用にそれぞれ1点ずつ用意した。これらは、使用度に応じて、また、ララが繰り返す奮闘ぶりを反映させる必要から、定期的に取り替えられた。

メインの衣装の上に、そしてロンドンと香港での特定のシーン用に、ヴィキャンデルはパーカーを身に着けることもあった。また、衣装の下には、ひざ、すね、腰にパッドを装着することも多く、水中シーンでは体にぴったりしたウェットスーツを着用した。

映画の大部分で、ララはぴったりしたタンクトップを着用している。衣装デザイナーたちはそのデザインに予想外に苦勞することになった。「あのタンクトップは、アリシアがもっと若いときにダンサーとして着ていたレオタードの全体的な雰囲気ヒントを得たんだ。フロントとバックが対称でなければいけないんだよ」とウォンシックは説明する。「衣装合わせ

のときに、何種類か試したあとで、コリーンが突然、私を見て、『お願い、これを縫製室へ持っていき、切り離してから2着のフロントをつなげて』と言いだした。それで私はそれをお針子さんに渡し、手早くやってもらって、部屋に戻り、アリシアが着てみたら、完璧だったんだ。結局、私たちは220着のタンクトップを買って110着のタンクトップを作った。適切な色になるよう染色し、もちろん、ストーリー展開に合わせてさまざまなダメージを反映させたんだ」

だが、アトウッドとウォンシックが直面した最大の難問は衣装のデザインではなく、ヴィキャンデルの体の変化だった。ウォンシックはこう語る。「セットからは、『パンツがアリシアに合わない！』という声がしょっちゅう聞こえてきた。私は、彼女がやせてきたに違いないと思ったんだが、セットの担当者はそんなことはないと言う。それで私は直接アリシアを見にいき、ワークアウトのせいで彼女の体自体が変化していることに気づいた。彼女の太ももは太くなっていたが、ウエストと腰は細くなっていたんだ。すると彼女のトレーナーのマグナスが近づいてきて、謝りながら、『こうなると思っておいたよね』と言った。そんなわけで、私たちは数日ごとに衣装のサイズを調整しないといけなかった。彼女の体がようやく変化を止めるまでの6週間ぐらいで、彼女のウエストを7.5センチ程度詰めたよ」

ヴィキャンデルは映画の大部分を基本的に同じ衣装で撮影したのだが、それは彼女だけではなかった。島の傭兵や作業員たちは長ければ7年は同じ服を着ていることになる。そのため、衣装デザイナーたちは、1960年代のロシアのズボン、フランスの外国人部隊のシャツ、古着屋で選んできたさまざまなベルトやブーツなど、古い兵士の服装を基本形として、傭兵たちの衣装を調達した。

墓を掘る作業員たちの衣装として、ウォンシックは、「ロサンゼルスで古着屋を何軒も回った」と言う。「そして、切り離し、染色し、シミに見えるようにナトリウムをかけた1970年代、80年代の服をいくつものコンテナでセットに送ったんだ。作業員たちは島に上陸してからずっと、一着で過ごしてきたわけだから、ほんとうに汚く見せる必要があった」

「ヴォーゲルが墓を暴けば、女王の呪いが世に放たれる」

『トゥームレイダー ファースト・ミッション』の世界観

ロンドンのハックニー地区やショーディッチ地区、クロフト家の屋敷の外観を務めるウィルトシャー州ソールズベリー近くにある英国貴族の邸宅ウィルトン・ハウスの外観など、いくつかのシークエンスがイギリスで撮影された以外は、『トゥームレイダー ファースト・ミッション』の主な撮影は、南アフリカのケープタウンとその周辺でおこなわれた。

「ローア・ウートッグ監督と製作のグレアム・キングの映像スタイルに大きな魅力を感じた」と美術のゲイリー・フリーマンは言う。「ヒッピー文化やロンドンの芸術スタイルから、忙しく行きかう香港の港や有史以前の奥深い雰囲気をもつ地図にも載っていない日本の島まで、心躍る挑戦になった。それにNH90の最先端軍用ヘリコプター、鋼鉄のトロール漁船、滝でひっくり返る第二次世界大戦の爆弾など、いろいろなものがこの一作に全部詰め込まれているんだ」

本作のために創作され、ララ・クロフトの初めての任務で使用されるすべてのものが、フリーマンとそのチームのクリエイティブな想像力に拍車をかけた。

香港の港のシークエンスは、ケープタウンから20分のところにある趣のある漁師町ハウト・ベイで撮影された。ウートッグ監督はこう言う。「水に浮かぶ歩道やレストランをそこら中に配置し、たくさんエキストラで埋め尽くした。ワイヤーでカメラを飛ばしたから、とても楽しいシークエンスの撮影になったよ」

撮影監督のジョージ・リッチモンドがイギリスから持ち込んだ、とても頼りになるスパイダーカムのことである。このカメラは、支柱を取り付けて使い、ケーブルカメラに似ているが、クレーンを使うよりも機能的でかなりの高さからさまざまなショットを可能にし、あらゆる方向から撮影することができる素晴らしい3次元環境を作り出すカメラなのだ。リッチモンドの照明班もまた、手持ちタブレットを用い、通常なら多くの調整作業が必要になるところを、強さ／方向性／色温度をほんの数分で調整できるようにした。

香港にも一定期間居住する中国系アメリカ人俳優ダニエル・ウーは、フリーマンが作り出した港に驚いたと言う。「僕

は漁村から10分くらいのところに住んでいるんだ。このセットに入った時、あらゆるディテールや、特に店の中の小さなポスターや箸といった小道具を見て、まるで家に戻ったように感じた。それに、300人くらいのエキストラが中国語を話しながら行きかっていたからね。ケープタウンの夏の熱気でさえ、香港と同じだと感じた。とてもリアルで感動したよ」

ララが香港にいる時間は短い。ルー・レンを探しに行き、彼の船“エンジュアランス号”で彼を見つける。美術のフリーマンは、脚本が要求していることを満たせるように、かなりのリサーチを重ね、その船をデザインした。「その地域と、ルー・レンというキャラクターにとってどんな船が合うのかを考えた。もちろん、その船は、理論上は、香港から日本の島まで、荒波を超えて600マイル以上を旅することになる。船を買うか、借りるかしようと思ったが、ケープタウンはちょうどマグロのシーズンで空いている船がなかった。そこで平底船の上に載せる船をデザインしたんだ。それなら、タンクの中で浮くこともできるし、静止しているだけじゃなくて、入港する動きもできる。それに加えて、重要なシークエンスでは、5軸ジンバルを搭載して進んだり、大砲が作り出す大きな波にも持ちこたえられるように設計した」

エンジュアランス号のタンクは、ケープタウン・フィルムスタジオに建てられた。そのタンクは、ブルースクリーンが必要な港でのララの追跡シーンなど、そのほかの港でのシーンにも対応した。また、ヤマタイビーチでの激しい嵐や、滝から落ちる時にララがつかまる日本の爆撃機の翼のシーンもそこで撮影された。セットには、爆撃機のコックピット、クロフト家の地下室、リチャード・クロフトの秘密の書斎、大理石の墓、そして死の落とし穴などがある。

ケープ・ワインランドにあるパールという小さいながらも美しい町が、さまざまな森の追跡シークエンスや、ボーゲルのキャンプ、墓の入り口などのシーンで、理想的な空間を提供した。撮影班にとっての最大の困難は、毎日セットに向かうために、荒れて曲がりくねった埃だらけの砂利道を街から1時間かけてドライブしなくてはならないことだった。また、パールを含むエリア全体の気温が45℃もあるいちばん暑い地域で、その暑さが撮影を通して問題となった。撮影班に同行する看護師は常に日焼け止めを携帯しなくてはならなかったのだ。

「南アフリカのワイン地帯での撮影は、あまりの暑さとそこら中にサソリがいることが分かるまでは、素晴らしいアイデアだと思った」とウートツ監督は笑いながら語る。「幸運にも、撮影班はヘビやサソリに対応してくれる係を雇い、セットをきれいに、安全に保つことができたが、さすがのサソリ係も太陽だけはどうすることもできなかったよ」

墓のあるヤマタイという架空の島について、ウートツ監督はできるだけリアルに見えるようにしたいと考えていたと、美術のフリーマンは言う。「墓の入り口には、打ち捨てられた花崗岩の採石場を偶然見つけたのだが、おそらく80年くらい使われていなかったと思う。素晴らしい地形で、興味深い場所だが、花崗岩を掘削した跡があった。数千年前に誰かがその地下に素晴らしい仏塔を建てたとしたらどうだろう。まず『彼らはどうやってそこにたどり着いたのか？ どうやって出たのか？』を考えねばならない。でも、その掘削した跡が我々に有利に働いてくれたんだ。そこをツタや緑の堆積物などで覆い隠すと、素晴らしいセットになった」

ヒミコ女王の墓の内装は、ケープタウンの西側にあるアトランティック・フィルム・スタジオで撮影された。美術のフリーマンは、再びかなりのリサーチをおこない、デザインを決めていった。「日本の建築物の非常に面白い時代を扱っている」とフリーマンは言う。「サムライ映画に出てくる古くて寂れた仏塔じゃない。本当に古代の、異次元的なものを作りたいかった。そうすれば、主人公たちがその墓の中に入った時に、この世とは思えない雰囲気が出る。神話的な性質が欲しかった。大げさにする必要はない。表面には何もなくて、シンプルで、厳粛で、幾何学的なものが欲しかったんだ。そこで詳しく描かれた中国の墓を調べ、そこから模様を考え出した。それから、日本の対称的な形を取り入れ、冷酷で厳しいブルータリズム様式のような少し近代的なものを加えた。するとより研ぎ澄まされたセットができあがったんだ」

「最後は光と雰囲気だった」と美術のフリーマンは続ける。「撮影のリッチモンドが、僕の作った、名前は恐ろしそうじゃないけれど、奇妙な日本の水鳥たちを見事に照らしてくれた。そのおかげで、キャラクターたちが入って感じる恐怖が倍増されたと思う」

「フリーマンと美術部が素晴らしいセットを作ってくれた。墓のセットに初めて入ったとき、僕は思わず息をのんだ。罨や秘密のドアや……謎に満ちていたんだ」と、美術のフリーマンや撮影のリッチモンド、そして彼らの才能あふれるチームの素晴らしい貢献を称えながら、ウートツ監督は言う。

「セットがすごかったわ」とヴィキャンデルは言う。「何度も、セットに行っては自分をつねってみたわ。私はアドベンチ

ャー映画の大ファンだけど、これほどリアルなセットで撮影するなんて思ってもみなかったからなの。彼らが作り出した空間も大理石も、何もかもが素晴らしい。私の中の少女の部分が、はしゃいで飛び跳ねていた。本当に魔法のようだったの」

ヴィキャンデルは、撮影中に子供をつれて会いに来た友達に、その思いを伝えた。「彼らに同じ経験をしてほしかったの」と彼女は微笑みながら言う。「私はみんなの代わりに演じているだけなの。私と同じように、きっと子供たちもワクワクしてくれると信じているわ」

本作のユニークな創作品のいくつかは、小道具の匠ポール・パーディによって制作された。なかでも最も重要なものは、ララと父親が用いる凝った装飾の日本のからくり箱である。これが、最後に島にとって重要なターニングポイントであることがわかる。パーディのチームは、さらに、「トゥームレイダー」のゲームシリーズで使われるツルハシも複製した。世界でたった3本しか残っていないオリジナルを制作した会社を突き止め、彼らに再現してもらったのである。シーンの要求に応じて、リアルなもの／ハードなもの／ソフトなもの／頭部がないものなど、いろいろなバージョンが作られた。そのほかの重要な小道具には、クロフト家の紋章がついた鍵、リチャードのノート、ヤマタイの暗号化された地図、そしてララの象徴的な弓矢などである。

音楽のジャンキー・XLことトム・ホルケンボルフは、本作の音楽に、ゲームと同じエネルギーと強烈さをもたらすと同時に、ララの心の旅を強調しながら、危険なシーンやアクションを際立たせたいと考えた。

「私が大好きなアドベンチャー映画と同じように、この映画にも、巨大なセットや、神秘的な扉やミステリーがある。それが観客の目の前で開きながら、観客を本当にエキサイティングなアドベンチャーへと引き連れていくの。それに、この旅で見せるララの好奇心や頑固さや情熱が私は大好きだわ。そして彼女は自分を解放し、魔法の世界に入っていく。観客には、このララ・クロフトの葛藤や痛みを感じてほしい。そして私と同じように彼女を応援してほしいの」とヴィキャンデルは語る。

製作のグレアム・キングが言葉を添える。「これは、若者も老人も、男性も女性も、あらゆる観客層が楽しめる映画だ。壮大なアクション満載の、スーパーヒーロータイプの映画の中心には、強烈で情感にあふれた家族のつながりが描かれている」

「ララ・クロフトが旅に出るとき、この先に何が待ち受けているのか、彼女は知らない」とウートツグ監督は言う。「彼女は困難にうまく立ち向かわねばならない。多くの試練を通して、これから待ち受けるあらゆるアドベンチャーへの準備を整え、彼女は真のトゥームレイダーになっていくんだ。なぜ彼女でなければならないのか？ 観客には、ララが自問しながら本当の自分を発見していく姿を楽しみながら体感してもらいたいと思っている」



キャスト

アリシア・ヴィキャンデル(ララ・クロフト) ALICIA VIKANDER (Lara Croft)

米アカデミー賞受賞歴をもち、同世代のなかでも最も有望な女優のひとりとみなされている。『ピュア 純潔』(10・未)で映画デビューを果たして以来、幅広い役柄を演じて注目を浴びてきた。

トム・フーパー監督の『リリーのすべて』(15)でゲルダ・ヴェイナーをセンシティブに演じ、米アカデミー賞最優秀助演女優賞を受賞。この演技で、全米映画俳優組合(SAG)賞、放送映画批評家協会賞など多くの賞を獲得し、ゴールデングローブ賞と英アカデミー(BAFTA)賞には、『リリーのすべて』と『エクス・マキナ』(14)の両方で、それぞれ主演女優賞と助演女優賞に同時ノミネートされた。

近作には、ジャスティン・チャドウィック監督作『Tulip Fever』(17)、諍いが絶えないふたりの姉妹がアドベンチャーを求めてヨーロッパ中を旅する『Euphoria』(17)、J・M・レッドガードの小説に基づき、エリン・ディグナムが脚本を担当しヴィム・ヴェンダースが監督したサスペンスロマンス『Submergence』(17/共演:ジェイムズ・マカボイ)などがある。

また、前作から8年を経てポール・グリーングラス監督とマット・デイモンがチームを組み、大きな期待が寄せられた「ボーン」シリーズの最新作『ジェイソン・ボーン』(16)、漂流中のボートから赤ん坊を救い出した西オーストラリア州の沖合に住む灯台守の夫婦の物語『光をくれた人』(16/監督:デレク・シアンフランス、共演:マイケル・ファスベンダー、レイチェル・ワイズ)にも出演。

ヴェラ・ブリテンの回顧録に基づいて映画化された『戦場からのラブレター』(14・未)では、主人公ヴェラを演じ、2015年には、アレックス・ガーランドが監督デビューを果たした賞受賞作で前述の『エクス・マキナ』でも主人公を演じ、オスカー・アイザック、ドナルド・グリーソンと共演。1964年のTVシリーズに基づいてガイ・リッチーが監督した『コードネーム U.N.C.L.E.』(15)にも出演している。

さらに、ビル・コンドン監督の『フィフス・エステート/世界から狙われた男』(13・未)では、アンケ役を演じ、ベネディクト・カンバーバッチ、ダニエル・ブリュールと共演し、スウェーデン映画『ホテルセラピー』(13・未)にも出演し、前述『ピュア 純潔』の監督リサ・ラングセットと再びチームを組んだ。この作品では、脳に障害を持つ赤ちゃんを産んだあと、グループセラピーに出席し、さまざまなトラウマに苦しんでいる人々と出会う若い女性エリカを演じている。それ以前には、ニコライ・アーセル監督の『ロイヤル・アフエア 愛と欲望の王宮』(12/共演:マッツ・ミケルセン)に出演。侍医と恋に落ちる若きデンマーク女王の物語を中心に描いたこの作品は、米アカデミー賞最優秀外国語映画賞にノミネートされた。

ベルリン映画祭のコンペティション部門で上映されたエラ・レムハーゲン監督の『Kronjuvelerna』(11)では、フランガンシア・フェルナンデス役を演じた。次に、『アンナ・カレーニナ』(12)で英語を言語とする映画に初めて出演し、その名を世界中の観客にひろめた。キーラ・ナイトレイ、ドナルド・グリーソン、ジュード・ロウと共演したこの作品でキティ役を演じている。ほかの出演作品には、『ガンズ&ゴールド』(14/共演:ユアン・マクレガー)、『セブンス・サン 魔法使いの弟子』(14・未/共演:ジュリアン・ムーア、ジェフ・ブリッジス)などがある。

2010年、前述のスウェーデンドラマ『ピュア 純潔』のカタリナ役で映画デビューを飾り、その演技でスウェーデンのオスカーと言われる権威あるゴールデン・ビートル賞最優秀主演女優賞を受賞した。12年には、ヨーロッパ映画賞の“シューティング・スター”のひとりに選ばれ、13年には、BAFTA賞ライジングスター賞にもノミネートされている。

ドミニク・ウェスト(リチャード・クロフト) DOMINIC WEST (Richard Croft)

イギリス国内外で公開される映画、アメリカのTV番組、ロンドンの舞台まで活動の場を幅広く網羅し、イギリスとアメリカの両方で順調なキャリアを築いてきた。ダブリンにあるトリニティ・カレッジを卒業後、ロンドンにあるギルドホール音楽演劇学校で学んだのち、ピーター・ホール演出の「かもめ」に出演し、イアン・チャールソン賞最優秀新人賞を受賞した。

すぐに映画界での成功が続く。『28DAYS(デイズ)』(00・未)ではサンドラ・ブロックと、『モナリザ・スマイル』(03)で

はジュリア・ロバーツと、『フォーガットン』(04)ではジュリアン・ムーアと共演し、『300<スリーハンドレッド>』(06)ではセロン役を熱演した。ほかに、『リチャード三世』(95)、『サバイビング・ピカソ』(96)、『トゥルー・ブルー』(96・未)、『スター・ウォーズ エピソード1/ファントム・メナス』(99)、『真夏の夜の夢』(99)、『ロック・スター』(01)、『シカゴ』(02)、『ハンニバル・ライジング』(07)などがある。

TVでは、アメリカで最も高い評価を受けたTVシリーズのひとつであり、5シーズン放送された HBO 放送の「THE WIRE/ザ・ワイヤー」(02~08)に出演し、ジミー・マクノルティ役を演じ、ファイナルシーズンの1エピソード(08)では監督も務めた。また、チャンネル4の英アカデミー(BAFTA)賞ノミネートシリーズ「The Devil's Whore」(08)にも出演し、オリバー・クロムウェルを演じた。

舞台では、ロイヤル・ナショナル・シアターで上演されたハーレイ・グランビル・バーカー作「The Voyage Inheritance」(演出:ピーター・ギル)、ウエストエンドで上演された「お気に召すまま」(演出:デイビッド・ラン、共演:ヘレン・マックロリー)、2006年夏にウエストエンドのロイヤル・コート・シアターで上演されて高い評価を受けたトム・ストッパード作「Rock N' Roll」(演出:トレバー・ナン)、ロンドンのドンマー・ウェアハウスで上演されたペドロ・カルデロン・デ・ラ・バルカ作「人生は夢」といった作品に出演している。

次に、『センチュリオン』(10・未/監督:ニール・マーシャル、共演:マイケル・ファスベンダー)、『アウェイクニング』(11)、ヒット作『ジョニー・イングリッシュ 気休めの報酬』(11)に出演。TVでは、ITV 放送の高評価を受ける「Appropriate Adult」(11)に出演し、2012年5月に英アカデミー(BAFTA)TV賞最優秀主演男優賞を受賞し、アビ・モーガン監督の「THE HOUR 裏切りのニュース」(11~12)のヘクター・マッデンの演技ではゴールデングローブ賞にもノミネートされた。

11年には、ダッチェス・シアターで上演された「Butley」でタイトルロールを演じ、シェフィールドのクルーシブル・シアターで上演された「オセロ」では、前述「THE WIRE/ザ・ワイヤー」の共演者クラーク・ピーターズと同じ舞台に立った。12年には、10月にロイヤル・コートで上演されたジェズ・バターワース作「The River」に出演し、13年には、シェフィールドに戻り、クルーシブル・シアターで上演された「マイ・フェア・レディ」に出演した。

次に、BBC4のTVドラマ「Burton and Taylor」(13)に出演し、リチャード・バートンを演じ、エリザベス・テイラー役のヘレナ・ボナム・カーターと共演した。さらに、ゴールデングローブ賞を受賞したアメリカのTVシリーズ「アフエア 情事の行方」(14/共演:ルース・ウィルソン、モーラ・ティアニー、ジョシュア・ジャクソン)にも出演。映画では、カンヌ映画祭でプレミア上映されて批評家からも観客からも高評価を得たマシュー・ウォーチャス監督の『パレードへようこそ』(14)、アリア・ヴィキャンデルと共演した『戦場からのラブレター』(14・未)に出演した。

16年には、ジョディ・フォスター監督の『マネーモンスター』(共演:ジョージ・クルーニー、ジュリア・ロバーツ、ジャック・オコンネル)に出演し、ドンマー・ウェアハウスで上演されたクリストファー・ハンプトン作「危険な関係」(演出:ジョージ・ルーク、共演:ジャネット・マクティア)の舞台にも立っている。

ウォルトン・ゴギンズ(マサイアス・ヴォーゲル)WALTON GOGGINS (Mathias Vogel)

最近、ハリウッドで最も尊敬されている優れた映像作家、クエンティン・タランティーノとスティーブン・スピルバーグが製作した映画で重要な役柄を演じた。米アカデミー賞受賞歴をもつスピルバーグ監督の『リンカーン』(12)では下院議員のウェルス・A・ハッチズを演じ、同賞受賞歴をもつ脚本家/監督のタランティーノがメガホンをとった『ジャンゴ 繋がれざる者』(12)では奴隷を訓練するファイトトレーナー、ビリー・クラッシュを演じ、『ヘイトフル・エイト』(15)で再びタランティーノ監督とタッグを組み、レッドロックの新任保安官だと自称する南部の反乱分子クリス・マニックスを演じた。

近作は、ヒットシリーズの第3弾『メイズ・ランナー: 最期の迷宮』(18)。待機作は、ポール・ラッドが主演するスーパーヒーロー映画『アントマン』(15)の続編で2018年7月6日より全米公開予定の『Ant-Man and the Wasp』である。

ほかの近作には、『Three Christs』(17/共演:リチャード・ギア)がある。ミルトン・ロキーチの伝記小説に基づき、エリック・ナザリアンが脚本を担当し、ジョン・アブネットが監督を務めたこの作品は、トロント国際映画祭でワールドプレミアが上映された。

TVの近作には、HBO放送シリーズ「バイス・プリンシパルズ」(16~17/共演:ダニー・マクブライド)がある。この演技で17年度放送映画批評家協会賞にノミネートされた。「Eastbound & Down」(09~13)を手がけたマクブライドとジョディ・ヒルが企画/製作総指揮を務める「バイス・プリンシパルズ」は、高校の運営に携わるふたりの人間を描いたダークコメディである。マクブライドとともに、学校長の座を張り合う、権威にとりつかれた副校長を演じている。

また、ヒストリー・チャンネルのTVシリーズで、エリート集団ネイビーシールズの周りで現在起こっていることにインスパイアされたアクションドラマ「Six」(17~)の第1シーズン全8話に出演した。ジハード組織ボコ・ハラムから住民たちを守るために、アフリカの村をパトロールする、元シールチーム“シックス”のリーダー、リップ・タガートを演じている。

10年以上にわたり、TV界において、強烈な魅力を放つ俳優のひとりとして活躍してきた。気骨に溢れた賞受賞ドラマシリーズ「ザ・シールド ~ルール無用の警察バッジ~」(02~08)は、7シーズン放送され、ややこしくてキレイやすい刑事シェーン・ベンドレルを演じて高い評価を受け、TV批評家協会(TCA)賞ドラマ部門インディビジュアル・アチーブメント賞にノミネートされた。また、このシリーズで監督を務めたカート・サッターと再びチームを組んだFX放送のドラマシリーズ「サン・オブ・アナーキー」(08~14)では、トランスジェンダーの売春婦ビーナス・バン・ダムを演じ、放送映画批評家協会賞に2度ノミネートされ、トランスジェンダーのコミュニティに新しい光をもたらした。また、6シーズン続いたFX放送のピーボディ賞受賞ドラマシリーズ「JUSTIFIED 俺の正義」(10~15)で、ボイド・クラウダーを鮮烈に演じ、エミー賞に1度、放送映画批評家協会賞に4度ノミネートされている。

数十本の映画でロバート・デュバルやアンソニー・ホプキンスのようなレジェンドたちと仕事をし、素晴らしいキャリアを築いてきた。これまでに、ロバート・ロドリゲス製作の『プレデターズ』(10)やロドリゲス監督作『マチェーテ・キルズ』(13)、ロッド・ルーリー監督の『わらの犬』(11・未)、ジョン・ファブロー監督の『カウボーイ&エイリアン』(11)、『G.I.ジョー バック2リベンジ』(13)、『エージェント・ウルトラ』(15)など多種多様な作品に出演してきた。

カメラの裏側でも活躍している。ジニー・ミュール・ピクチャーズの事業パートナーたちとともに、米アカデミー賞最優秀短編映画賞を受賞した『The Accountant』(01)で製作を担当し、出演も兼ねた。このチームで製作と監督を務めた初めての長編映画『Crystal』(04)は、サンダンス映画祭のドラマコンペ部門に出品された。出演も兼ね、ビリー・ボブ・ソントンと共演している。また、製作と出演を兼ねた3本目の長編映画『Randy and the Mob』(07)はナッシュビル映画祭で長編映画部門観客賞を獲得した。

ジニー・ミュール社のパートナーたちと製作した4本目の『That Evening Sun』(共演:ハル・ホルブルック)は、09年3月にテキサス州オースティンで開催されたサウス・バイ・サウスウエスト映画祭でワールドプレミアが上映され、ドラマ作品観客賞とアンサンブル演技部門特別審査員賞を受賞した。この作品はさらに14以上の映画祭で上映されて、サウスイースタン映画批評家協会賞ワイアット賞を受賞し、インディペンデント・スピリット賞の2部門にもノミネートされるなど、多くの賞を獲得した。

マシュー・アルパーとともに、酒造会社モルホーランド・ディスティリングの共同オーナーを務めている。モルホーランド社は、禁酒法以来、ロサンゼルスで最初の蒸留酒会社のひとつとして、ロサンゼルスの活気に満ちた豊かな文化を映し出すような高級蒸留酒を生産し続けてきた。砂漠の街に水を引くことによってロサンゼルスの可能性を押し広げた先人ウィリアム・モルホーランドに因んだ社名である。現在、モルホーランド社は、ロサンゼルスの多様性と活気にインスパイアされた匠の蒸留酒を製造するという使命を果たすため、アメリカン・ウイスキー/ウォッカ/ジンという別の種類の水をこの街に運んでいる。モルホーランド社(www.mulhollanddistilling.com)は、天使の街ロサンゼルスに最高のものだけをもたらすために、米国中で最高の蒸留酒製造業者、ブレンダー、バーテンダーたちと仕事をしてきた。

旅を愛し、ベトナム、カンボジア、タイ、中米、モロッコ、インドなど世界中を旅している。写真愛好家でもあり、自身の旅をフィルムに焼き付けてきた。インドへの旅で撮影した写真は、次のURLで見ることができる。(http://hindutoyoutoo.blogspot.com.)

ダニエル・ウー(ルー・レン) DANIEL WU (Lu Ren)

中国系アメリカ人俳優／監督／プロデューサーである。オレゴン大学で建築の学位を取得して卒業したのち、香港の主権がイギリスから中国へ返還される1997年、その出来事を自分の目で見るとともに香港に移り住んだ。香港で、コマーシャル作品にスカウトされたのち、映画にも出演するようになった。演技に夢中になり、98年に中国語の映画で初めてプロの俳優としての役についた。そのひとつが『玻璃(ガラス)の城』(98)で、そののち4度ノミネートされることになる香港映画賞に、最優秀新人賞部門で初めてノミネートされた。

98年の幸先のよい映画デビュー以来、60本を超える作品に出演してきた。ベニー・チャン監督の『ジェネックス・コップ』(99)でブレイクし、05年には、『ワンナイト イン モンコック』(04)で香港映画賞最優秀男優賞、そして少年時代から憧れていたジャッキー・チェンと共演した『香港国際警察／NEW POLICE STORY』(04)では同賞最優秀助演男優賞に同時ノミネートされ、後者では台湾の金馬奨最優秀助演男優賞を獲得した。また、監督と脚本と出演を兼ねた『The Heavenly Kings』(06)では香港映画賞最優秀新人監督賞を受賞した。

ほかの出演作品には、第40回金馬奨最優秀男優賞にノミネートされた『Night Corridor』(03)、フランク・コラチ監督のリメイクでジャッキー・チェンと再び共演した『80デイズ』(04)、『ブラッド・ブラザーズ -天堂ロ-』(07)、『盗聴犯 ～死のインサイダー取引～』(09)、金馬奨にノミネートされた『Like a Dream』(09)、『アイアン・フィスト』『エウロパ』(共に12)、ジャッキー・チェンが監督／製作／脚本／主演を務めた『ライジング・ドラゴン』(12)、人気ビデオゲーム「World of Warcraft」に基づいたダンカン・ジョーンズ監督の壮大なSFアドベンチャー『ウォークラフト』(16)、ディーン・デブリン監督の『ジオストーム』(17)などがある。また、AMC放送シリーズ「バッドランド ～最強の戦士～」(15, 17～)では主演と製作総指揮を務めている。

クリスティン・スコット・トーマス(アナ・ミラー) KRISTIN SCOTT THOMAS (Ana Miller)

英アカデミー(BAFTA)賞を1回、イブニング・スタンダード英国映画賞を4回、ロンドン映画批評家協会賞を2回、全米映画俳優組合(SAG)賞を1回受賞し、映画史に確固とした地位を築いてきた。

フランス語と英語を話し、両言語圏の映画に等しく出演してきた。米アカデミー賞最優秀作品賞を含め9部門を受賞したアンソニー・ミンゲラ監督の『イングリッシュ・ペイシエント』(96／共演:レイフ・ファインズ)の演技で、同賞とゴールデングローブ賞にノミネートされた。

ロバート・アルトマン監督の『ゴスフォード・パーク』(01)では、キャストとともに SAG 賞映画部門最優秀アンサンブル演技賞、放送映画批評家協会賞最優秀アンサンブル演技賞を分かち合った。この作品は、米アカデミー賞最優秀作品賞にノミネートされ、ジュリアン・フェロウズが同賞最優秀オリジナル脚本賞を受賞した。

リチャード・カーティスが脚本を担当し、マイク・ニューウェルが監督を務め、米アカデミー賞最優秀作品賞にノミネートされたコメディ『フォー・ウェディング』(94)の演技で、BAFTA 賞最優秀助演女優賞とイブニング・スタンダード英国映画賞の最優秀女優賞を受賞し、ブレイクした。出演作品には、初めてイブニング・スタンダード英国映画賞の最優秀新人賞を受賞した『ハンドフル・オブ・ダスト』(88／監督:チャールズ・スターリッジ)、『赤い航路』(92／監督:ロマン・ポランスキー)、『リチャード三世』(95／監督:リチャード・ロンクレイン)、イブニング・スタンダード英国映画賞最優秀女優賞を受賞した『エンジェル&インセクト／背徳の館』(95・未／監督:フィリップ・ハース)と同監督の『真夜中の銃声』(00・未)、『ミッション:インポッシブル』(96／監督:ブライアン・デ・パルマ)、ロバート・レッドフォードが監督／製作／主演を務めた『モンタナの風に抱かれて』(98)、『ランダム・ハーツ』(99／監督:シドニー・ポラック)、『海辺の家』(01／監督:アーウィン・ウィンクラー、共演:ケビン・クライン)、ヒット作『唇を閉ざせ』(06・未／監督:ギョーム・カネ)、BAFTA 賞と英インディペンデント映画(BIFA)賞の最優秀助演女優賞にノミネートされた『ノーウェアボーイ ひとりぼっちのあいつ』(09／監督:サム・テイラー＝ジョンソン)などがある。

カトリーヌ・コルシニ監督作『熟れた本能』(09・未)の演技で4度目のイブニング・スタンダード英国映画賞最優秀女優賞を受賞し、フランスのオスカーと言われるセザール賞最優秀女優賞にもノミネートされた。セザール賞には、以前にも『ずっとあなたを愛してる』(08)でノミネートされ、ゴールデングローブ賞、BAFTA 賞にもノミネートされた。

ほかに、『危険なプロット』(12/監督:フランソワ・オゾン)、レイフ・ファインズが監督と主演を兼ねた『エレン・ターナン～ディケンズに愛された女～』(13・未)、『オンリー・ゴッド』(13/監督:ニコラス・ウィンディング・レフン)、『パリ3区の遺産相続人』(14/監督:イスラエル・ホロビッツ、共演:ケビン・クライン、マギー・スミス)などがある。

近作には、フランスコメディ『Au bout des doigts』(17/監督:ルドビク・バーナード、共演:ランベール・ウィルソン)、サリー・ポッター監督の『The Party』(17/共演:ティモシー・スポール、パトリシア・クラークソン、キリアン・マーフィ)、ウィンストン・チャーチルの妻クレメンティンを演じるジョー・ライト監督の『ウィンストン・チャーチル/ヒトラーから世界を救った男』(17/共演:ゲイリー・オールドマン、リリー・ジェイムズ)などがある。後者は、イギリスの首相に任命されたのちにかつてない困難に立ち向かうウィンストン・チャーチルの姿を掘り下げて描いている。

舞台では、ピーター・モーガン作「The Audience」、オールド・ビック座で上演の「エレクトラ」(演出:イアン・リクソン)などがある。演出家リクソンの作品には、その後も、ウエストエンドで上演された「昔の日々」「Betrayal」、ロイヤル・コートで上演されて高評価を得た「かもめ」に出演している。「かもめ」のアルカージナの演技で、オリビエ賞最優秀女優賞を受賞し、ブロードウェイでも同役を演じた。ほかに、ウエストエンドで上演された「As You Desire Me」「三人姉妹」、フランスツアーを敢行したラシーヌ作「ベレニス」といった作品に出演している。

TVでは、TV映画「第十の男」(88/監督:ジャック・ゴールド、共演:アンソニー・ホプキンス、デレク・ジャコビ)、TVミニシリーズ「Body & Soul」(93/監督:モイラ・アームストロング)などがある。

ハンナ・ジョン＝カーメン(ソフィー)HANNAH JOHN-KAMEN (Sophie)

短い演技キャリアながら、強烈な役柄を数多く演じ、TV/映画/舞台で称賛を浴びている。数年のうちに大きな期待を集めるスタジオ作品に出演、エキサイティングなキャラクターを演じ、人気があり尊敬される業界人たちと一緒に仕事をし、注目すべき国際的な俳優としての強固な存在感を示してきた。

待機作は、ゴースト役を演じる、ヒット作『アントマン』(15)の続編『Ant-Man and the Wasp』である。前作に続きペイトン・リードが監督を務め、ポール・ラッドがスコット・ラング/アントマンを演じ、エバンジェリン・リリー、ミシェル・ファイファー、ローレンス・フィッシュバーンと共演する。アンチ・ヒーローのゴーストは、コミック本では元々男性のキャラクターだったが、この作品では、スーツを着ることで目に見えない存在となる聡明な女性発明家になっている。2018年7月より世界中で公開予定である。

また、スティーブン・スピルバーグ監督の『レディ・プレイヤー1』(18年4月20日日本公開予定)ではフネイル・ザンドール役を演じ、オリビア・クック、サイモン・ペッグ、タイ・シェリダン、T・J・ミラーと共演する。アーネスト・クラインの2011年の小説「ゲームウォーズ」(SBクリエイティブ刊)に基づくこの作品は、3月29日より全米公開が予定されている。現在は、TVの人気アクションアドベンチャー「KILLJOYS/銀河の賞金ハンター」(15～)の第4/第5シーズンを撮影中である。このシリーズで、逮捕收容連合(RAC)のために仕事をしながら、クアドとして知られる4つの惑星で活動する3人組の賞金ハンターのひとり、ダッチを演じている。共演は、アーロン・アッシュモア、ルーク・マクファーレン。カナダで製作され、日本ではHuluが配信している。アメリカでは15年6月よりシーズン1、16年7月よりシーズン2、17年7月よりシーズン3が配信された。

チャーリー・ブルッカーが企画と製作総指揮を担当し、高い評価を受けてエミー賞を受賞したTVシリーズ「ブラック・ミラー」(11～17)の、11年のシーズン1のエピソード「1500万メリット」でセルマ・テルス役を演じたのち、16年のシーズン3のエピソード「拡張現実ゲーム」にも出演しソーニャ役を演じた。モダンライフと新しいテクノロジーのダークサイドを掘り下げる「ブラック・ミラー」は、毎回異なるキャスト、異なる設定、異なるリアリティで描かれる。

HBO/スカイ・アトランティックの人気ファンタジードラマ「ゲーム・オブ・スローンズ」シリーズ(11～)の「第六章:冬の狂風」(16)で、ドスラキの未亡人でデナーリス・ターガリエンの親友オルネラ役を演じた。近年で最も称賛を浴び、世界中で視聴されているこのシリーズは、ジョージ・R・R・マーティンの小説に基づき、ピーター・ディンクレイジ、レナ・ヘディ、エミリア・クラーク、キット・ハリントン、メイジー・ウィリアムズ、ソフィー・ターナーなどオールスターキャストが集結している。また、英仏合作TVシリーズ「The Tunnel」(13, 16～18)のシーズン2「The Tunnel-サボタージュ」(16)でロー

ザ・ペルサウド役を演じた。デンマーク／スウェーデンのTVシリーズ「The Bridge／ブリッジ」(11, 13, 15, 18)を脚色したこのシリーズは、イギリスとフランスのふたりの刑事が渋々パートナーを組み、一連の犯罪を解決していく姿を描いている。スティーブン・ディレイン、クレマン・ポエジー共演。

「スター・ウォーズ」シリーズの7番目の作品で記録破りのヒット作となった『スター・ウォーズ／フォースの覚醒』(15)で映画デビューを飾り、ハリソン・フォード、キャリー・フィッシャー、アダム・ドライバー、ジョン・ボイエガ、デジー・リドリー、ルピタ・ニョンゴ、オスカー・アイザックなどオールスターキャストに参加した。J・J・エイブラムスが共同脚本／共同製作／監督を務め、世界中で 20 億ドル以上の興収をあげたこの作品は、『スター・ウォーズ エピソード VI／ジェダイの帰還』(97)から 30 年後を舞台とし、孤独な女性レイとストームトルーパーの脱走兵が、伝説のルーク・スカイウォーカーを探して銀河系を旅する姿を描いている。

アビ・モーガンが企画と製作総指揮を務める BBC 放送の賞受賞シリーズ「THE HOUR 裏切りのニュース」(11～12)のシーズン2で、ローザ・マリア・ラミレス役を演じ、ドミニク・ウェスト、ベン・ウィショーと共演した。その後、サリー・ウェインライトが企画と製作総指揮を務める BBC1の賞受賞シリーズ「ハッピー・バレー」(14, 16)のシーズン1に出演し、ジャスティン役を演じ、サラ・ランカシャー、ジェイムズ・ノートンと共演した。

ほかに、ハワード・オーバーマン企画、英アカデミー(BAFTA)TV賞を受賞したチャンネル4シリーズでカーリー役を演じた「Misfits／ミスフィッツ―俺たちエスパー！」(09～13)、BBC1の高評価を受けるTVシリーズの 14 年のエピソードでヤスミン・ブレイク役を演じた「ミステリーin パラダイス」(11～)、「The Midnight Beast」(12,14)、「The Syndicate」(12～13, 15)、ラッセル・T・デビスがクリエイターを務めるチャンネル4の画期的なTVシリーズでバイオレット役を演じた「Cucumber」と「Banana」(共に 15)、BBC 放送のTV映画でナーラブ役を演じた「The Ark」(15)などがある。また、“スパイス・ガールズ”の歌をベースに、ジェニファー・ソーンダースが脚本を担当し、ジュディ・クレイマーが製作したミュージカル「Viva Forever!」で、ビバ役を演じた。この作品は、12 年 12 月にロンドンのウエストエンドで上演された。

イギリスのセントラル・スクール・オブ・スピーチ・アンド・ドラマを卒業する以前に、ITV 放送の「ホワイトチャペル 終わりになき殺意」(09～13)の 12 年のエピソードでロクシー役を演じて、スクリーンデビューを果たした。

スタッフ

ロアー・ウートグ(監督) ROAR UTHAUG (Director)

2002年にノルウェー国立映画学校を卒業。卒業制作の短編映画『Regjeringen Martin』(02)は、映画芸術科学アカデミーの学生アカデミー賞にノミネートされた史上2番目のノルウェーの学生映画となった。

『コールドプレイ』(未)で長編映画監督デビューを果たした。この作品は、06年10月13日よりノルウェーで公開され大ヒットを記録。40カ国で上映され、2本の続編も製作された。次に、子供たちの冒険を描いて大ヒットを記録した『レジェンド・オブ・シルバー 借りぐらしの妖精』(09・未)の共同監督を務めた。12年には中世のアクション映画『エスケープ 暗黒の狩人と逃亡者』(未)の監督を務め、この作品は70カ国以上で上映され、自身は「バラエティ」誌の“注目すべきヨーロッパの監督たち10人”のひとりに選ばれた。4作目の長編映画『THE WAVE / ザ・ウェイブ』(15)は、初めてのスカンジナビア産ディズスター・ムービーとなり、ノルウェーでその年の最高興収を記録し、米アカデミー賞にエントリーするノルウェー公式作品に選ばれた。

監督した作品はすべて世界各国に送り出され、国際的な映画祭で上映されている。映画の合間をぬい、世界各国でコマーシャル作品を監督し、数多くの賞を受賞している。

グレアム・キング(製作) GRAHAM KING (Producer)

米アカデミー賞受賞歴をもつプロデューサー。大作映画とインディペンデント映画の両方で、一流の業界人たちと仕事をしてきた。過去30年以上にわたり、45本以上の映画で製作／製作総指揮を担当し、米国内のボックスオフィスでは12億ドル以上、世界では28億ドル以上の興行収益をあげている。その作品は、批評家や映画人たちから称賛され、米アカデミー賞には61ノミネート、ゴールデングローブ賞には38ノミネート、英アカデミー(BAFTA)賞では52ノミネートを獲得している。現在、自身の製作会社GKフィルムズは、パラマウント映画と3年の非独占的ファーストルック契約を結び、映画の企画開発や製作に取り組んでいる。

自身もまた、現在、GKフィルムズの旗印のもとで、数多くの次期公開作品の製作に入っている。その作品には、ラミ・マレックがフレディ・マーキュリーを演じる伝記映画『Bohemian Rhapsody』などがある。GKフィルムズは最近サイファイ放送とパートナーシップを組み、ダン・シモンズの賞受賞ベストセラー小説「ハイペリオン」(ハヤカワ文庫SF刊)のTVシリーズ化に取り組んでいる。自身は、ブラッドリー・クーパー、トッド・フィリップスとともに製作総指揮を担当する。

映画では、これまでに、史実ドラマ『アルゴ』(12)の製作総指揮を担当し、この作品は米アカデミー賞／ゴールデングローブ賞／放送映画批評家協会賞／BAFTA賞の最優秀作品賞を受賞した。ベン・アフレックが監督と主演を務めたこの作品は、米映画協会(AFI)賞と全米映画批評会議賞、そのほか150人以上の批評家が選ぶ“2012年の映画トップテン”のひとつに選ばれた。また、サスペンスアクション『ワールド・ウォー Z』(13／主演:ブラッド・ピット)でも製作総指揮を担当し、この作品は世界興収5億4000万ドル以上をあげ、「エンターテインメント・ウィークリー」誌の“その年の映画トップテン”のひとつに選ばれた。

2011年には、さまざまなタイプの映画の製作を担当した。マーティン・スコセッシ監督の高い評価を受けたファンタジーアドベンチャー『ヒューゴの不思議な発明』では、プロデューサーとして米アカデミー賞とゴールデングローブ賞の最優秀作品賞にノミネートされた。この作品は、その年最多の11部門で米アカデミー賞にノミネートされ、200人以上の批評家が選ぶ“2011年の映画トップテン”のひとつに選ばれた。また、タイトルロールの声をジョニー・デップが務めた、ゴア・バービンスキー監督のアニメ『ランゴ』は米アカデミー賞最優秀長編アニメ賞を受賞。同年には、アンジェリーナ・ジョリーが監督デビューを飾った『最愛の大地』でも製作を担当し、この作品はゴールデングローブ賞最優秀外国語映画賞にノミネートされている。これにより、同じ年にゴールデングローブ賞のドラマ部門／アニメ映画部門／外国語映画部門の3つの異なるカテゴリーの最優秀作品賞にノミネートされた初めてのプロデューサーとなった。次に、ティム・バートのスーパーナチュラル・ゴシックホラー『ダーク・シャドウ』(12／出演:ジョニー・デップ、ミシェル・ファイファー、エバ・グリーン、ヘレナ・ボナム・カーター)の製作を担当した。

それ以前には、スコセッシ監督の犯罪ドラマ『ディパーテッド』(06/出演:レオナルド・ディカプリオ、マット・デイモン、ジャック・ニコルソン、マーク・ウォールバーグ)のプロデューサーとして米アカデミー賞最優秀作品賞を受賞。この作品は、同賞最優秀監督賞、最優秀脚色賞、最優秀編集賞も獲得している。

ハワード・ヒューズの人生を描いて高い評価を受けたスコセッシ監督の『アビエイター』(04/主演:レオナルド・ディカプリオ)で初めて米アカデミー賞最優秀作品賞にノミネートされ、BAFTA 賞最優秀作品賞を受賞した。さらに、全米製作者組合(PGA)賞より“その年のプロデューサー”に贈られるゴールデン・ローレル賞の栄誉にも輝いている。

そのほかの製作作品には、『ブラッド・ダイヤモンド』(06/主演:レオナルド・ディカプリオ)、歴史ドラマ『ヴィクトリア女王 世紀の愛』(09/主演:エミリー・ブラント)、サスペンス『復讐捜査線』(10/監督:マーティン・キャンベル、主演:メル・ギブソン)、ベン・アフレックが監督と主演を兼ねた犯罪ドラマ『ザ・タウン』(10/出演:ジェレミー・レナー)、ロマンチックサスペンス『ツーリスト』(10/出演:ジョニー・デップ、アンジェリーナ・ジョリー)、ブロードウェイのヒットミュージカルを複数の米アカデミー賞受賞歴をもつクリント・イーストウッドが映画化した『ジャージー・ボーイズ』(14)、米アカデミー賞にノミネートされた戦時下のロマンスをサスペンスタッチで描いた『マリアンヌ』(16/監督:ロバート・ゼメキス、出演:ブラッド・ピット、マリオン・コティヤール)などがある。また、それ以前には、スコセッシ監督の壮大なドラマで米アカデミー賞ノミネート作『ギャング・オブ・ニューヨーク』(02/出演:ディカプリオ、ダニエル・デイ=ルイス、キャメロン・ディアス)で、共同製作総指揮を担当した。

以前には、95年に自身が創立したイニシャル・エンターテインメント・グループ(IEG)の社長兼CEOを務めていた。IEG社での在職期間中、スティーブン・ソダーバーグ監督の米アカデミー賞受賞アンサンブルドラマ『トラフィック』(00)、マイケル・マン監督の伝記ドラマ『ALI アリ』(01/主演:ウィル・スミス)、ジョディ・フォスターが製作と出演を兼ねた『イノセント・ボーイズ』(02)といった作品の製作総指揮を担当した。TVでは、ミニシリーズ「ワールド・オブ・ブラック」(04)の製作総指揮を務めている。この作品のプロデューサーとして、エミー賞ミニシリーズ部門最優秀作品賞にノミネートされた。

イギリス出身。82年にアメリカにわたり、09年に大英帝国勲章オフィサーを受章した。

ジェニーヴァ・ロバートソン=ドワレット(脚本/原案)GENEVA ROBERTSON-DWORET (Screenplay / Story)

脚本に携わる作品には、『スーサイド・スクワッド』(16)の女性だけのスピンオフ作品『Gotham City Sirens』、ブリー・ラーソンが主演する『Captain Marvel』などがある。また、現在企画の段階にある『Aries』と『Hibernation』は、有名な“ブラックリスト”に載ったオリジナル脚本である。

ハーバード大学卒業。現在は、ロサンゼルスに拠点を置いている。

アラスター・シドンズ(脚本)ALASTAIR SIDDONS (Screenplay)

ドキュメンタリーとドラマの両分野を手がける脚本家/監督/プロデューサー。『アウトサイダーズ』(16/出演:マイケル・ファスベンダー、ブレンダン・グリーソン)でドラマ脚本を初めて担当し、製作も務めた。この作品は、トロント国際映画祭でプレミア上映された。現在、『Hyper』の脚本と、スティーブ・マックィーン監督のタイトル未定のBBC放送シリーズの脚本に取り掛かっている。また、マイケル・ファスベンダーが主演するDMCフィルムのTVシリーズにも携わっている。

2本のドキュメンタリー『Turn It Loose』(09)と『Inside Out』(13)の監督を務めた。後者は2013年にトライベッカ映画祭でプレミア上映され、14年にHBO放送でオンエアされた。

エバン・ドーハティ(原案)EVAN DAUGHERTY (Story)

大きな期待を寄せられた数多くの作品に携わり、ハリウッドで大ヒットを生み出す脚本家としての名声を勝ち取った。

原案と脚本を担当した『スノーホワイト』は、2012年の夏より世界中で公開されて大ヒットした。ニューヨーク大学の学生時代にこの脚本を書き、10年にはその脚本の入札合戦が繰り広げられ、過去数年において最高額で売却された脚本のひとつとなった。古典物語にひねりを加え、クリス・ヘムズワース演じるミステリアスな狩人エリックに光を当てた。エリックは、シャーリーズ・セロン演じる女王に、クリステン・シュワート演じるスノーホワイトを殺す刺客として送り込まれる。この脚本では、エリックを師と仰いだスノーホワイトは戦士となり、ふたりは一緒に、邪悪な女王を打ち負かすための壮大な冒険の旅に出る。

サスペンスアクション『キリングゲーム』(13/監督:マーク・スティーブン・ジョンソン、出演:ジョン・トラボルタ、ロバート・デ・ニーロ)でも脚本を担当。ボスニア戦争の退役軍人ふたりの気骨にあふれるキャラクターがおりなすサスペンスである。アメリカ人とセルビア人の元兵士が大自然を舞台に、積る恨みを晴らすため、肉体と精神を駆使し、壮絶な戦いを繰り広げる。

また、暗い近未来社会を舞台にした『ダイバージェント』(14)では、ベロニカ・ロスのベストセラー・ヤングアダルト小説の脚色を担当。そこでは、人類の性格ごとに、社会は“高潔”“勇敢”“博学”“無欲”“平和”という5つ共同体に分けられている。物語は、ライバルの共同体に参加するために家族のもとを去り、人生が永遠に変わってしまう16歳の少女を追いかけていく。また、マイケル・ベイが製作を担当した『ミュータント・タートルズ』(14)でも、世界中で愛されるコミック本とアニメシリーズを基にした脚色台本を書き、大成功を収めた。

映画のほかに、TVでも、ABC放送/NBC放送/サイファイ放送/HuluなどにTV脚本を提供したり、企画開発に携わったりしている。

パトリック・マコーミック(製作総指揮)PATRICK MCCORMICK (Executive Producer)

製作総指揮を務めた近作には、スコット・クーパー監督の『ブラック・スキャンダル』(15)、ロバート・ゼメキス監督の『マリアンヌ』(16)などがある。『ブラック・スキャンダル』はジョニー・デップとチームを組んだ6度目の作品となる。まず、マイク・ニューウェル監督の『フェイク』(97)でデップと初めて仕事をし、次にティム・バートン監督の2作『チャーリーとチョコレート工場』(05)と『スウィーニー・トッド フリート街の悪魔の理髪師』(07)でタッグを組み、その後、ハンター・S・トンプソンの小説に基づく『ラム・ダイアリー』(11)、デイビッド・コープ監督のコメディ『チャーリー・モルデカイ 華麗なる名画の秘密』(15)でも一緒に仕事をした。

ほかにも、『マフィア/最後の祈り』(88・未/主演:トム・ベレンジャー)、『ショック・トゥ・ザ・システム/殺意のシステム』(90/主演:マイケル・ケイン)、マーサ・クーリッジ監督の『愛に気づけば…』(94/出演:ジーナ・デビス、ジェイムズ・ガンドルフィーニ)、P・J・ホーガン監督の『ピーター・パン』(03/出演:ジェイソン・アイザック、ジェレミー・サンプター、レイチェル・ハード＝ウッド、リン・レッドグレイブ)、ブライアン・シンガー監督のファンタジーアドベンチャー『ジャックと天空の巨人』(13/出演:ニコラス・ホルト、スタンリー・トゥッチ、ユアン・マクレガー)といった作品の製作を担当している。

また、バリー・レビンソン監督の3作品で製作総指揮を務めている。レビンソン監督のバルティモアシリーズ第4弾『リバティ・ハイツ』(99・未/出演:エイドリアン・ブロディ、オーランド・ジョーンズ、ビービー・ニューワース、ジョー・マンテーニャ)、『ピース・ピープル』(00・未)、犯罪コメディ『バンディッツ』(01/出演:ブルース・ウィリス、ビリー・ボブ・ソントン、ケイト・ブランシェット)である。製作総指揮を担当したほかの作品には、ポール・マザースキー監督の『フライング・ピクルス』(93・未)、『陪審員』(96/出演:デミ・ムーア、アレック・ボールドウィン、ジェイムズ・ガンドルフィーニ)、クリス・コロンバス監督の『グッドナイト・ムーン』(98/出演:ジュリア・ロバーツ、スーザン・サラドン、エド・ハリス)、マイク・ニューウェル監督の『プリンス・オブ・ベルシャ/時間の砂』(10/出演:ジェイク・ギレンホール、ベン・キングズレー)などがある。

ジョー・ロス監督の『ニューヨーク・ベイサイド物語』(86/出演:ウェズリー・スナイプス)、ポール・マザースキー監督の『結婚記念日』(90/出演:ウディ・アレン、ベット・ミドラー)、ハーバート・ロス監督の『ボーイズ・オン・ザ・サイド』(95

／出演:ドリュー・バリモア、ウーピー・ゴールドバーグ、メアリー＝ルイズ・パーカー、マシュー・マコノヒー)では、共同製作を担当した。キャリア初期には、ポール・マザースキー監督の『ハドソン河のモスコ』(84・未)、アイバン・ライトマン監督の『ゴーストバスターズ』(84)、ブライアン・デ・パルマ監督の『Wise Guys』(86)で製作補／ユニットプロダクションマネジャーを担当した。

デニス・オサリバン(製作総指揮)DENIS O'SULLIVAN (Executive Producer)

グレーム・キングとともに、GKフィルムズの作品すべての製作／管理／統括をおこなっている。GKフィルムズにおいて、社の CEO であり、米アカデミー賞受賞歴をもつグラハム・キングと協力し、一流の業界人たちとコラボレーションしてきた。

キングとともに監修に携わっている次期公開作品には、エミー賞受賞歴をもつラミ・マレックがフレディ・マーキュリーを演じるマーキュリーとロックバンド“クイーン”の伝記映画『Bohemian Rhapsody』、フランスの古典『仁義』(70)をリメイクする『The Red Circle』などがある。

これまでに監修したGKフィルムズの作品には、ブラッド・ピットが主演したサスペンスアクション『ワールド・ウォー Z』(13)と『マリアンヌ』(16／監督:ロバート・ゼメキス)などがある。前者は、世界興収5億 4000 万ドル以上をあげ、「エンターテイメント・ウィークリー」誌の“その年の映画トップテン”のひとつに選ばれた。ほかにも、ベン・アフレック監督の犯罪ドラマ『ザ・タウン』(10)と米アカデミー賞最優秀作品賞を受賞した『アルゴ』(12)、マーティン・スコセッシ監督の高い評価を受けて米アカデミー賞にノミネートされたファンタジーアドベンチャー『ヒューゴの不思議な発明』(11)、自身が全米製作者組合(PGA)賞スタンリー・クレイマー賞を受賞し、ゴールデングローブ賞最優秀外国語映画賞にもノミネートされたアンジェリーナ・ジョリーの監督デビュー作『最愛の大地』(11)、ブロードウェイのヒットミュージカルをクリント・イーストウッド監督が映画化した『ジャージー・ボーイズ』(14)といった作品の監修を務めている。

共同製作を担当した作品には、ジャン＝マルク・バレ監督の歴史ドラマ『ヴィクトリア女王 世紀の愛』(09／主演:エミリー・ブラント)、ロマンチックサスペンス『ツーリスト』(10／出演:ジョニー・デップ、アンジェリーナ・ジョリー)などがある。前者は、米アカデミー賞3部門にノミネートされて最優秀衣装デザイン賞を受賞し、英アカデミー(BAFTA)賞では衣装デザイン賞とメイクアップ&ヘア賞にノミネートされて2部門とも受賞している。さらに、ゴールデングローブ賞の最優秀女優賞にもノミネートされた。

GKフィルムズ以前には、ニューヨークに拠点を置くハーベイ・カイトルの製作会社ゴートシンガーズでストーリー編集を担当し、トライベッカ・フィルムズではロバート・デ・ニーロの下で仕事をしていた。コロンビア大学では映画学科の文学士号を取得している。

ノア・ヒューズ(製作総指揮)NOAH HUGHES (Executive Producer)

15 年以上にわたり、デザインに全エネルギーを集中させ、情熱を注ぎ、ゲーム業界に多大なる貢献をしてきた。キャリアのほとんどを、ゲーム開発会社クリスタル・ダイナミクスで仕事をし、本作の映画化にも尽力し、クリスタル・ダイナミクス社のクリエイティブ・フランチャイズ・ディレクターとして、ララ・クロフトの旅を導き続けている。

ジョージ・リッチモンド(撮影)GEORGE RICHMOND (Director of Photography)

1990 年にキャリアをスタートさせ、カメラアシスタントとしてイギリスとアメリカの映画に携わった。その後7年間、出世の階段を駆け上がり、「Rough Riders」(97)で初めて撮影技師を務めた。これ以降、『キューティ・ブロンド』(01)、『クリスティーナの好きなコト』(02)、『新 Mr.ダマー ハリーとロイド、コンビ結成!』(03・未)、『シンデレラ・ストーリー』(04・未)、『ライラの冒険 黄金の羅針盤』(07)、『007／慰めの報酬』(08)、『タイタンの戦い』(10)、『戦火の馬』(11)、『スノーホワイト』(12)など、数多くの作品に撮影技師として携わった。

映画に加えて、マーク&スペンサー、ダヴ、アディダス、アスダ、アルディ、ジョニーウォーカーなど、有名な一般消費者向け商品や大手小売業者のコマーシャルを数多く手がけている。ジョニーウォーカーのコマーシャルで発揮したスキ

ルが業界で認められ、2009 年度 BTA クラフト賞最優秀撮影技師賞を受賞した。

撮影技師としての最高レベルに達し、『The Hide』(08)で初めて長編映画の撮影監督を任された。以来、『ワイルド・ビル』(11・未)、『キングスマン』(14)と続編『キングスマン:ゴールデン・サークル』(17)、『イーグル・ジャンプ』(16・未)など多数の映画で撮影監督を務めている。

ゲイリー・フリーマン(美術) GARY FREEMAN (Production Designer)

若いころ、大学で建築とインテリアデザインを学んだ。やがて『ブレードランナー』(82)や『未来世紀ブラジル』(85)、スタンリー・キューブリック監督の数々の作品に影響を受け、映画業界で働きたいと熱望するようになった。

卒業後、ロンドンの LWT 放送で多額の予算を投じた軽快なエンターテイメント番組に携わり、経験を積んだ。この経験のおかげで、イギリスの映画会社に入り、ロンドンで活躍する有数のアートディレクターたちと出会い、彼らのもとで仕事をした。ダンテ・フェレッティ、トム・サンダース、ヤン・ロールフスをはじめ、多くの一流プロダクションデザイナーたちのアート部門で働きながら、アシスタントから製図や縮尺模型の製作者、そして統括アートディレクターまで昇進した。

『マレフィセント』(14)で美術を担当して以来、ファンタジー基調の作品から現実に基づいた作品までを手がけるようになり、確かな技術力であらゆるジャンルの映画を担当してきた。その作品には、『エベレスト 3D』(15)、待機作『Mowgli』などがある。アンディ・サーキスが監督する『Mowgli』では、ロンドンの防音スタジオに緻密なジャングルを作らなければならなかった。原作は、写真のようにリアルに描写されているが、同作は、会話をする生き物たちとのバランスを考慮してファンタジー的な特色も取り入れている。

これまでに、統括アートディレクターを務めた作品に、『タイムライン』(03)、『80デイズ』(04)、『イーオン・フラックス』(05)、『トゥモロー・ワールド』(06)、『スウィーニー・トッド フリート街の悪魔の理髪師』『サンシャイン2057』『ナショナル・トレジャー／リンカーン暗殺者の日記』(いずれも 07)、『プリンス・オブ・ペルシャ／時間の砂』『タイタンの戦い』(10)、『ロード・オブ・クエスト ～ドラゴンとユニコーンの剣～』(11・未)、『パイレーツ・オブ・カリビアン／生命(いのち)の泉』(11)、『47RONIN』(13)、『シンデレラ』(15)、ロバート・ゼメキス監督の『マリアンヌ』(16)などがある。また、アートディレクターとしては、ブダペストで『スパイ・ゲーム』(01)、ロシアで『ボーン・スプレマシー』(04)に携わった。

また、『101』(96)、『ジャッカール』『鳩の翼』(共に 97)で製図を担当し、『プライベート・ライアン』(98)では、アートディレクターの代理を務めた。さらに、アートディレクター助手を務めた作品に、TV映画「アリス・イン・ワンダーランド／不思議の国のアリス」(99)、『トゥームレイダー』(01)がある。

スチュアート・ベアード(編集) STUART BAIRD (Editor)

ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンに通ったのち、『if もしも……』(68)でイギリス人演出家／監督リンゼイ・アンダーソンの個人助手を務め、映画業界に入った。この作品で、プリプロダクションから製作、編集、ポストプロダクションまで、映画製作のあらゆる局面を知ることができた。

次に、ケン・ラッセル監督に引き合わせてもらい、『恋する女たち』(69)に撮影中は助監督、ポストプロダクションでは編集助手として携わった。以後、ラッセル監督とは『恋人たちの曲／悲愴』『肉体の悪魔』『ボーイフレンド』(いずれも 71)、『狂えるメサイア』(72)、『マーラー』(74)など、10 作を超える映画でタッグを組んだ。編集助手からスタートし、音響編集監修、音楽編集、そして映像編集を手がけるまでに躍進。26 歳までに、ラッセル監督の『Tommy／トミー』(75)、『リストマニア』(75・未)、『バレンチノ』(77)、製作補も兼務した『アルタード・ステーツ／未知への挑戦』(80)の編集を担当した。

ケン・ラッセル監督作品に携わる一方で、ほかの作品の編集も手がけている。その作品には、ピーター・ハイアムズ監督の『アウトランド』(81)、リチャード・ドナー監督の『オーメン』(76)、『スーパーマン』(78)と「スーパーマン II リチャード・ドナー CUT 版」(06)などがある。ドナー監督とも親交を深め、『レディホーク』(85)、『リーサル・ウェポン』(87)と続編『リーサル・ウェポン2／炎の約束』(89)、『3人のゴースト』(88)、『ラジオ・フライヤー』(92)、『マーヴェリック』(94)な

どでコラボレートし続けた。また、フレッド・ジンネマン、ジョン・マッケンジー、マイケル・アプテッド、ヒュー・ハドソン、マーティン・キャンベル、サム・メンデスなど、有名監督たちの作品の編集も手がけた。

これまでに、『スーパーマン』と『愛は霧のかなたに』(88)で米アカデミー賞最優秀編集賞にノミネートされた。また、『スーパーマン』、ボンド映画『007/カジノ・ロワイヤル』(06)と『007 スカイフォール』(12)で全米映画編集者協会(ACE)賞にノミネートされた。

このほか、『シュワルツェネッガー/プレデター』(87)、『デッドフォール』(89)、『ロビン・フッド』『ニュー・ジャック・シティ』(共に91)、『M:I-2』(00)、『トゥームレイダー』(01)などに携わった。かつてワーナー・ブラザーズ映画に重役として籍を置き、クリエイティブ編集コンサルタントを務めたのち、ワーナー・ブラザーズ作品『エグゼクティブ・デジジョン』(96)で長編映画監督デビューを果たし、次いでワーナー・ブラザーズ作品『追跡者』(98)の監督を務めた。ほかの監督作には『ネメシス/S.T.X』(02)がある。

マイケル・トロニック(編集)MICHAEL TRONICK (Editor)

UCLA で政治学の学位を取得し、サンフランシスコ州立大学で映画/TV製作の単位を履修したのち、映画産業でキャリアをスタートさせた。

ハリウッドの映画製作会社ジーン・マッケイブ・プロダクションズで、初めて仕事を体験。マッケイブ社でポストプロダクションの仕事に興味を芽生えた。同社のスタッフで編集者のひとりに、ダン・カーリンがいた。カーリンは、サム・ペキンパー監督作の音楽を手がけた作曲家ジェリー・フィールディングの音楽編集も担当していた。カーリンとチームを組み、カリフォルニア州リシーダのカーリンの家のガレージに作られた編集室で作業をおこなうようになった。カーリンのもとで仕事をしている間に、フィルム・エディターズ・ローカルに認められ、TVシリーズやTV映画の音楽編集を担当し始めた。マイケル・リッチー監督の『タッチダウン』(77)で、初めて長編映画の音楽編集に携わった。また、初めて担当したミュージカル映画『ブルックリン物語』(78/監督:スターリン・ドーン)で、作曲家ラルフ・バーンズとの付き合いが始まった。以後、ボブ・フォッシー監督の『オール・ザット・ジャズ』(79)と『スター80』(83)でもバーンズと組んでいる。

また、『うるさい女たち』(87)の音楽編集を担当する数年前に、映画編集者のジョン・ライトから、ライトが編集するTV映画の音楽シーンの映像編集の仕事を持ちかけられた。このとき、初めて映像編集の仕事に携わった。その後、ウォルター・ヒル監督と編集者フリーマン・デビスから『ストリート・オブ・ファイヤー』(84)の音楽編集と、ミュージカルシーンの映像編集を依頼された。再び『シュワルツェネッガー/プレデター』(87)で音楽編集の仕事に戻ったが、『ビバリーヒルズ・コップ2』(87)で依頼を受け、ビリー・ウェバーとクリス・レベンソンとともに映像編集をおこない、この作品で、専任の映画編集者としての地位を確実につかんだ。

現在、映画編集者部門を代表して、映画芸術科学アカデミーの理事を務め、2期目に入る。また、同アカデミーの科学技術評議会のメンバーであり、同評議会のパブリック・プログラム委員会の共同委員長も務めている。さらに、フィルム・エディターズ・ローカル 700 の理事、全米編集者協会(ACE)の理事も務め、同協会の副会長に選任された。スケジュールに余裕があるときは、ウィンストン・セーラムにあるノースカロライナ州立芸術大学で客演講義もおこなっている。

コリーン・アトウッド(衣装)COLLEEN ATWOOD (Costume Designer)

ロブ・マーシャル監督の『シカゴ』(02)と『SAYURI』(05)、ティム・バートン監督のヒット作『アリス・イン・ワンダーランド』(10)、デイビッド・イエーツ監督の『ファンタスティック・ビーストと魔法使いの旅』(16)で衣装を担当し、米アカデミー賞を4度受賞。また、ジリアン・アームストロング監督の『若草物語』(94)、ジョナサン・デミ監督の『愛されし者』(98・未)、バートン監督の『スリーピー・ホロウ』(99)と『スウィーニー・トッド フリート街の悪魔の理髪師』(07)、ブラッド・シルバリング監督の『レモニー・スニケットの世にも不幸せな物語』(04)、マーシャル監督の『NINE』(09)と『イントゥ・ザ・ウッズ』(14)でも米アカデミー賞にノミネートされている。

近作『ミス・ペレグリンと奇妙なこどもたち』(16)で、バートン監督と再びタッグを組んだ。ほかに、同監督とのコラボレート作品に、『シザーハンズ』(90)、『エド・ウッド』(94)、『マーズ・アタック!』(96)、『PLANET OF THE APES 猿の惑星』

(01)、『ビッグ・フィッシュ』(03)、『ダーク・シャドウ』(12)、『ビッグ・アイズ』(14)がある。また、ジョナサン・デミ監督とは、『愛されちゃって、マフィア』(88・未)、米アカデミー賞最優秀作品賞受賞作『羊たちの沈黙』(91)、『フィラデルフィア』(93)でチームを組んだ。さらに、ジョニー・デップ主演作『パブリック・エネミーズ』(09)や『ツーリスト』(10)そして『ラム・ダイアリー』(11)の衣装も担当している。

このほか、衣装を手がけた幅広いジャンルの作品には、初めて衣装デザイナーとして携わった『家族の絆』(84)、『刑事グラハム／凍りついた欲望』(86)、『ワイアット・アープ』(94)、『すべてをあなたに』(96)、『ガタカ』(97)、『M:i:Ⅲ』(06)、『スノーホワイト』(12)、『アリス・イン・ワンダーランド／時間の旅』『スノーホワイト／氷の王国』(共に 16)などがある。

ティモシー・A・ウォンシック(衣装)TIMOTHY A. WONSIK (Costume Designer)

コネティカット州で生まれ育った。マサチューセッツ芸術大学で陶芸とデザインを学ぶためにボストンに移った。ボストンに 11 年間住み、織物や衣服が好きであることに気づき、スタイリストとして働き始めた。この転職のためにロサンゼルスへ向かうことになった。

ロサンゼルスに移り住むと、映画関係の仕事をしている友人からクリエイティブな仕事の幅を広げる可能性を示唆され、出版業界から映画界へと転身する決心をした。ロサンゼルスでの初期の仕事で、伝説の衣装デザイナー、ボブ・マッキーと組み、その後長年にわたり一緒に仕事をした。映画に加え、TVからラスベガスのステージショー、コマーシャル、自身がエミー賞を受賞した 2002 年ユタ州ソルトレークシティー冬季オリンピックなど、さまざまな領域で衣装に関する仕事に携わってきた。

マーベル・フィルム・スタジオで衣装／アーカイブ部門の部門長に就任し、スタジオのすべての自社製作映画に携わり、アメリカでおこなわれるすべて撮影の統括をおこない、さらに国際的に活躍するデザイナーたちへの支援もおこなった。また、TVシリーズ候補作のための衣装もデザインした。マーベルに約5年間在籍したのち、フリーランスで仕事をするために辞職した。

トム・ホルケンボルフ(音楽)TOM HOLKENBORG (Composer)

グラミー賞ノミネート歴をもち、マルチプラチナ・アルバムを輩出するプロデューサー兼作曲家。キーボード／ギター／ドラム／バイオリン／ベースを演奏するマルチプレイヤーでもあり、スタジオ技術にも精通している。

現在映画音楽の作曲を中心に活動している。音楽を担当した作品に、ロバート・ルケティック監督の『パワー・ゲーム』(13)、ニール・バーガー監督の『ダイバージェント』(14)、ノーム・ムーロ監督の『300<スリーハンドレッド>～帝国の進撃～』(14)、アクション・サスペンス『X-ミッション』(15)、犯罪コメディ『マット・ドライブ』(15)、スコット・クーパー監督の『ブラック・スキャンダル』(15)、ジョージ・ミラー監督の大ヒット作『マッドマックス 怒りのデス・ロード』(15)、ジャウム・コレット＝セラ監督の『ラン・オール・ナイト』(15)、マルティン・コールホーベン監督の『ブリムストーン』(16)、ニック・マチュー監督の『スペクトル』(16・未)、ロブ・ブルース監督の『Distance Between Dreams』(16)、ハンス・ジマーとともに担当したザック・スナイダー監督の『バットマン vs スーパーマン ジャスティスの誕生』(16)、ティム・ミラー監督の『デッドプール』(16)、ニコライ・アーセル監督の『ダークタワー』(17)などがある。

母国オランダで多くの映画音楽を提供し、キャリアの基礎を築いた。そののち、『キャットウーマン』(04)でクラウス・バデルト、『ドミノ』『キングダム・オブ・ヘブン』(共に 05)でハリー・グレッグソン＝ウィリアムズといった有名作曲家たちに師事し、成長を続けた。そして、アニメ「マダガスカル」シリーズ(05, 08, 12)、『メガマインド』(10)、クリストファー・ノーラン監督の『インセプション』(10)や『ダークナイト ライジング』(12)、ザック・スナイダー監督の『マン・オブ・スティール』(13)などでハンス・ジマーと組み、大きな成功を収めていった。

作曲のキャリア初期には、『バイオハザード』(02)、『アニマトリックス』(03)、オリジナルビデオ「リディック・アニメーテッド」(04)、『DOA／デッド・オア・アライブ』(06)、『Bandslam』(09)などに楽曲を提供した。

1993 年にインダストリアル系ロックバンド“ナーブ”を結成し、アーティストとしてのキャリアをスタートさせる一方で、

“セパルトウラ”や“フィア・ファクトリー”といったハードコアなメタルバンドをプロデュースしていった。エレクトロ・ブレイクビーツに魅了され、97年に、ジャンキー・XLを始動させ、デビューアルバム「Saturday Teenage Kick」をリリース。さらに5枚のアルバムをジャンキー・XLの名前でプロデュースし、世界中の大きなステージで演奏してきた。2002年、プロデュース／リミックスしたエルビス・プレスリーの「ア・リトル・レス・カンヴァセーション」のリミックス版が24カ国でナンバーワンヒットを記録。その成功に続いて、デイブ・ガーン、ロバート・スミス、チャック・Dといった有名アーティストたちとコラボレートし、“コールドプレイ”、“ディペッシュ・モード”、ブリトニー・スピアーズ、ジャスティン・ティンバーレイクといった多くのアーティストたちのリミックスを手がけた。また、「ニード・フォー・スピード」「ザ・シムズ」「SSX」などのビデオゲームの音楽や、ナイキ、ハイネケン、アディダス、キャデラック、VISAなどの世界キャンペーン用のコマーシャル音楽も担当している。

表 4